高田富史
附
日露戰役高田
出身軍人並戰死者氏名
251
494

特652

高田富史序

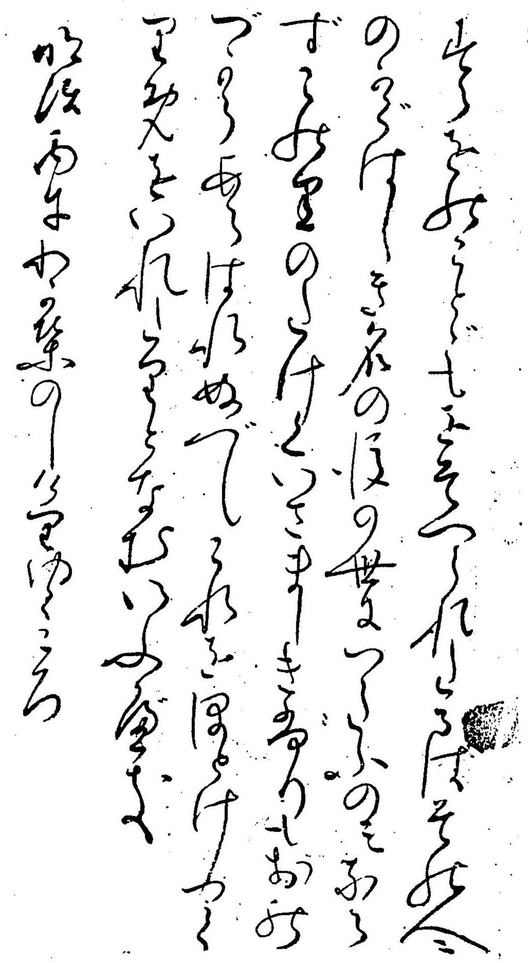
宮川翁往年高田栗之著自神社佛閣官衙學校病院至商店工場茶肆酒舖其變遷進化之由來周詳記載於是高田之盛衰章々顯示世矣然卷帙浩攫不便携帶頃者削其繁去其冗精選簡潔改爲小册子頗便携帶名曰高田富史土人讀之可知父祖艱營之慘澹於旅人携之不得導者而可知地方之概況其益非內外豈少小哉翁本武人也刀槍之技弓馬之術自少壯修練研究皆窺其閫奧文學非其所長然至近年勵精刻苦既超耳順而精力不衰頻々著作其志氣可欽羨也余既序前著後著之序亦所不辭也於是乎書其由以弁於卷首

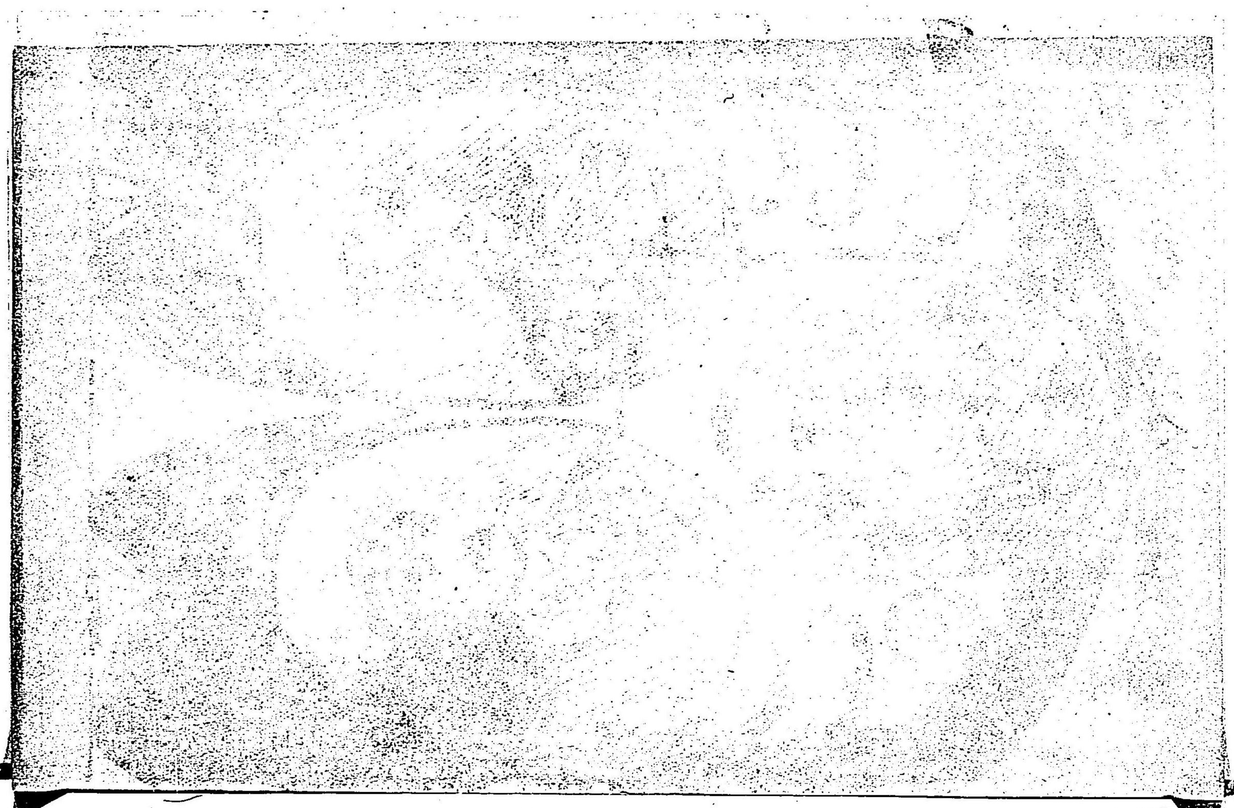
明治三十七年五月

天懷逸人

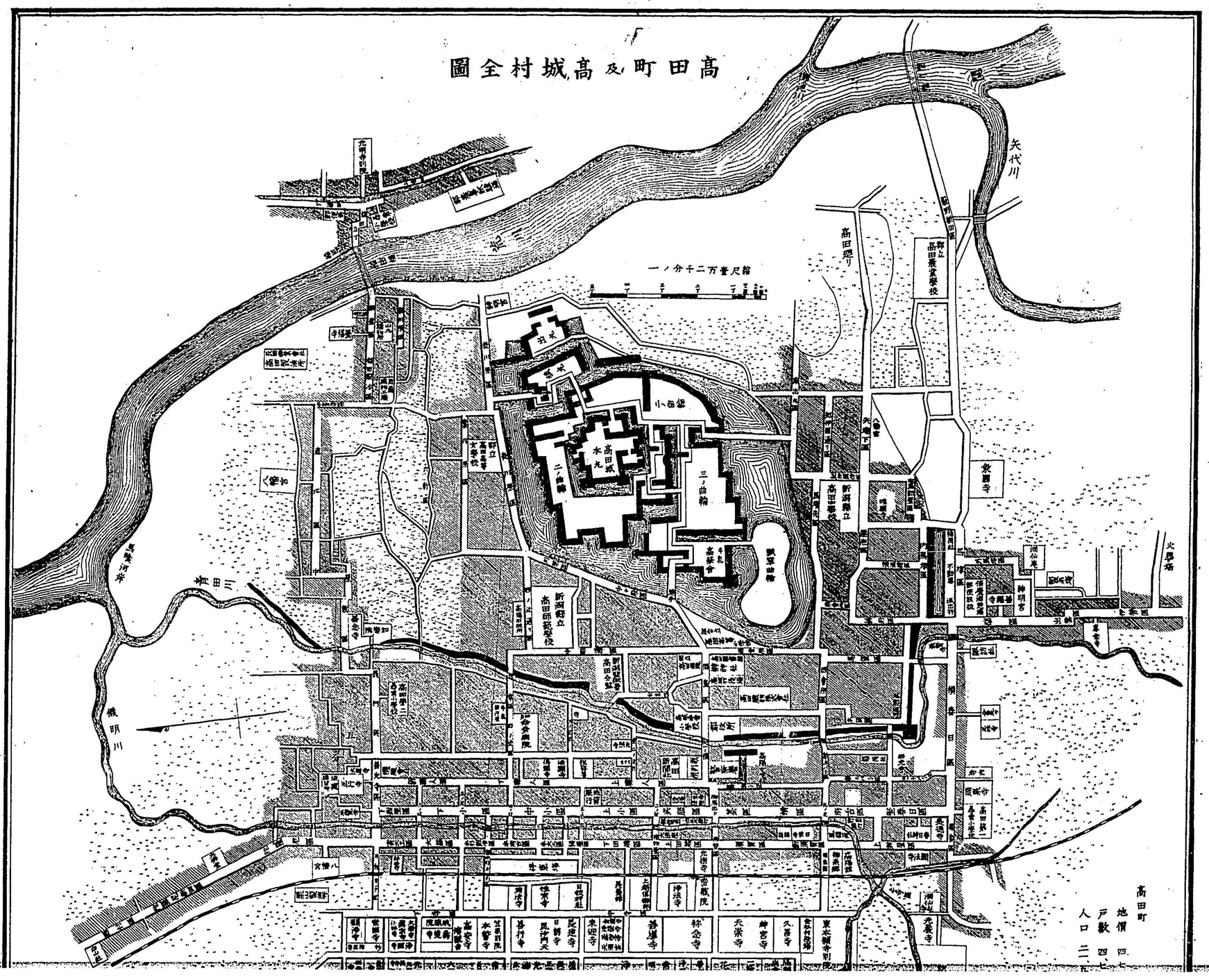
明治 39 7 28 内交

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]





高田町及高城村全圖



高田町及高城村全圖

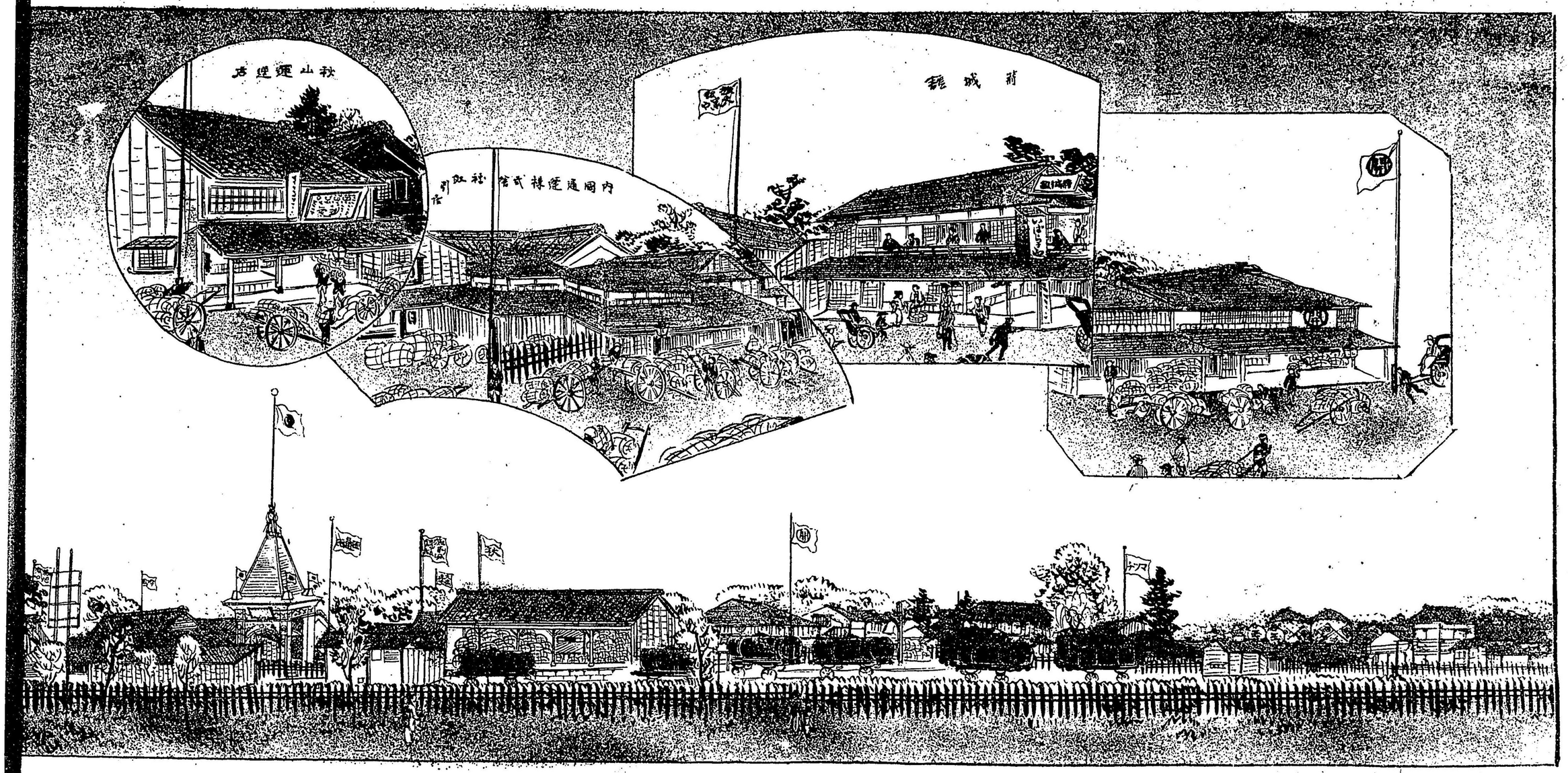
縮尺壹万二千分ノ一

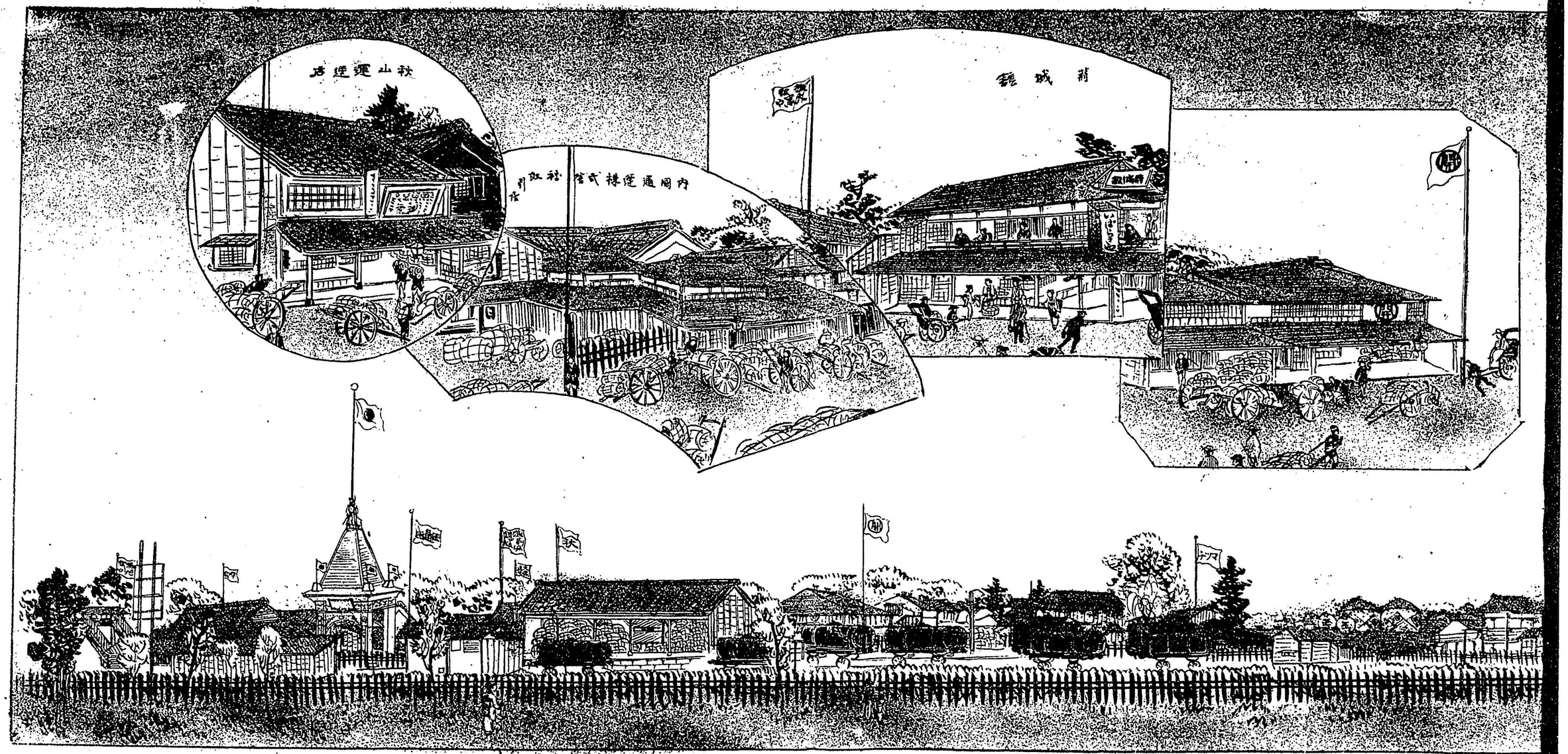
高田町

地價 四、七九七

戸數 四、七九七

人口 二、五三〇


秋山運送店
内國通運株式會社
前橋


秋山運送店
内国通運株式會社
熊城前

高田富史

有卓小林福宗

閲得桑滄幾變更　倒中悲喜也堪情

抄書一卷古今事　不負高田富史名

緒言

高田城は北越の藩鎮にして往昔松平忠輝卿を封せられし所なり南は關川大田切の嶮西は連山蛇走海に迫る其海岸に不知親駒返の險あり北は日本海に面し直江津あり東は米山嶺且つ扉濱七里の砂漠あり關川は城東を圍流し實に堅城たり今や廢城となりて古跡を存す市街は南北一里東西廿餘町此間に羅列する町數九十八人口二万四千七百八十餘は金谷山に花を賞し夏は寺町に涼を納れ秋は熊の林に茵を狩り冬は本邦著名の積雪丈餘にして實に穴居の想ひあり維新後泰西文物の輸入と共に海に瀕船陸に鐵道開け農工商に一變遷を與へ昔時の面目を一新するに至れり各商家繁昌して一都會の地となる因て高田富史を作る素より無學薄識見る人其固陋を尤ひる莫は幸なり

蚊睫巣逋齋識

◎目　次

高田富史　初篇

目　次

高田高城一町村全圖　高田停車場圖
陸軍歩兵少佐　伊奈重久君小照
海軍機關少監　竹内三千三君小照
海軍大尉　内田弘君小照
序　歴史　沿革　官衙　學校　上越婦人會　高田教會　神社佛閣

第二篇

目　次

金谷山　巴墳墓　馬塚　地藏宮　扇橋及燕子花　大杉　猫俣塚　高田銀行　成資銀行　高田貯蓄銀行　直江津商業銀行支店　直江津銀行支店　協盛社
運送會社　高田織物會社　高田機業會社　高田製糸會社　高陽爛寸會社　佐藤織物合資會社　高田女工場　レイス工場　染織講習所　生命保險會社　明治共濟會社　櫛模合資會社　高田新聞社　越後日報社　高田病院　驅黴院　知命堂病院　避病院　眼科醫院　齒科醫院　牛乳　高榮社　石版印刷所　活版印刷所　印刷合資會社　人力車　自轉車　旋舍　青田川三橋　寫眞　電話

上越倶樂部　社交倶樂部　大弓場　導場　卷烟草　小間物商店

第三篇

目　次

茶道　挿花　裁縫　私立女子裁縫學校　裁縫所　鏑　粟飴及翁飴　鑄物師　自動消火器　筆工　玻璃製造所　瓦燒工場　團扇　葡萄酒　油槽場　木材塗　ボール箱　素麺切　柳糸卿　高陽館　長養館　日進館　牛肉店　遊郭　龍技會　盆栽　鞠工場　時計　大漁座　呉服商店　烟草製造所　書肆　田島印刷所　床場　浴室　協同湯　塵芥箱　辻便所

附　言

目　次

高田高城一町村醫士及辨護士其他住所氏名
藥劑師及藥舗住所氏名
日露戰役高城高田一町村出身軍人及從軍者氏名
並感狀　謝狀　招待狀　慰問狀等寫
戰死者氏名
伊奈少佐内田大尉二君畧傳

◎目　次

◎目　次

竹内機關少監伊奈曹長二君碑
高田尚武會建設碑

高田富史　初篇

歴史

往古鎮守府將軍源義家公奥州征伐の砌り春日山に暫時柴を築き蜂ケ峯と稱し山頂に春日神社ありしを慊なる現今の地春日村字春日に社殿を移し春日山と稱せり上杉民部大輔憲顯鎌倉管領基氏の執事より越後上野伊豆三ケ國を賜り同左近將監忠榮資俊院殿より越後府内城を拜領して春日山城に入部せらる實に貞治二年なり同民部大輔房方同民部大輔朝方同左馬之助房朝同相摸守房定同民部大輔房能同兵庫頭定實同彈正大弼輝虎入道謙信時中納言景勝の數代茲に居る慶長三年三月景勝奥州會津に移封堀左衛門尉秀治入部後ち福島城を築きて移る依て春日山城廢城となり十五年堀氏斷絶松平上總介忠輝卿福嶋城を賜り入る十七年高田落提ケ原に城く奥羽上野信越の諸侯へ手傳を命せられ松平陸奥守政宗臺命を奉し其臣片倉小十郎繩張普請奉行には瀧川豊前守伊藤右馬允山城宮内等なり之を高田城と稱し忠輝卿之に移る元和二年松平氏斷絶同年酒井左衛門尉家次入る同宮内大輔忠勝之に居る五年松平伊豫守忠昌入る九年松平越後守光長卿入る天和元年松平氏斷絶御番城となり村上城主榊原式部大輔新發田城主溝口信濃守長岡城主牧野駿河守等へ御預けとなる貞享二年稲葉丹後守正通入る元祿十四年戸田能登守忠眞入る寶永七年松平越中守定重入る同因幡守定遠同越中守定儀同越中守定賢之に居る寛保二年榊原式部大輔政永公入部同式部大輔政敬公同遠江守政令公同式部大輔政養公同式部大輔政愛公同式部大輔政敬公之に居る明治維新版籍奉還郭内對面所へ移住陸軍御用地と

なる其十一月政廳燒失し後ち橋門及三重櫓其他建物賣却せらる廿二年二月廢城となり御拂下價格一萬二千圓にて藩主榊原公數代居城の緣因を以て受領せられ從來の秣或は草花田畑等の收入より公租及ひ取扱事務員の給料其外雜費を去り殘餘を以て藩士子弟にして學資困難又は鰥寡孤獨者等へ下賜の恩惠あり當今學資を受け上京する者五名鰥寡孤獨者七名へ救助あり尙年々學生へ貸與の計畫あり

沿革

往古は茫々たる原野にして關川矢代川儀名川青田川の數川縱橫に流通したる地之を菖蒲ヶ原と云ふ慶長十七年伊達政宗臺命を奉し關川其他の諸川を利用して茲に城を築く乙を高田城又は鮫ヶ城と云ふ關川を城東に移し城西の川跡川を堀となし矢代川を乘國寺の南へ切替へ關川に注ぎ鴨島村を關川の東へ乙吉村を西南隅現今の地に移し青田川を外郭へ圍流し一の橋川是なり又儀明川を河良神社東より本裏町間を北流し五分一へ切替關川に入る當時の古跡を尋ぐれば現今府古區東裏に蓮池あり殘水青田川に注ぐ之を儀明川の古跡とす又桝形蓮池間の沼池現今良田南會所東裏を經て堀に入る小流之を青田川の古跡とす又馬出に乙吉神社あり乙吉村と共に移轉せしも社地の存するを以て後ち乙吉神社を勸請せりと廢藩前迄は該村より春秋祭典には夫々供物を奉納せしも今は廢せり

左の里言は當時の繁盛を知るに足る

高田郡なれど金谷の藥師花の高田を目の下たに

又築城後鞠歌とて女童子の唱へしも今は絕にて此の地方に謠ふものも無きに不思議や新發田會津奥州邊には今に謠へりと因に新發田の人阿部某氏の老母會津の人辰野宗治氏の老母等より傳聞の儘を記さん實際と相合はさるは歲月の久しき轉々して諸語を來たせしものならん清水氏博廣の註釋を附記し以て識者の一覽に供せん

アトラみことや、高田のれ城、しろは白壁八つひねつくり、れヽきはしらに往來橋か此橋は現今長門中云ふ其當時は名所のほふきばし扇橋ならん當城南乘國寺前に架する石橋にして其形ち扇面に似たるを以て扇橋と稱し築城の際矢代川を切替せし跡沼池となり此の邊り燕子花を一つに數うへらる植付け又名所の一つにれ舟はりう〳〵かへりう〳〵、直江津より五分一を經て稻田橋河岸へ日々川舟の數うへられたりと云ふ往來せる意味か現今も舟の往來せり五分一には荷揚場東は善光寺南信州のやはた入幡府中入だい山藥師、米山藥師年しに三度のれみとか開く、開く道者あり善光寺かやはた入幡ならん

の袖口みれば花ちかりんとさ、いよ〳〵、結句ありし樣なりしも失念せりとの事

高田町南北里許之を北陸道とし東西廿餘町土橋建石より東へ折れ稻田橋に至る之を奥州官道とす此の間に羅列せる町名を記せば伊勢、出雲、關、横春日、竪春日、府古、横、呉服、上小、中小、下小、下紺屋、土橋、陀羅尼、善光寺、長門、中屋敷、直江、本誓寺、稻田鍛治、鍋屋町之を本町通りと云廢番、上紺屋、新須賀、須加、上田端、下田端、桶屋、本杉鍛治、本府古、大工、大鋸、寄大工町を西裏町とし上職人、下職人、新職人、馬喰、椀屋町を東裏町とす勘左工門、兩替、檜物屋、杉の森、及物鍛治、新本杉鍛治、町を路次町と稱せり之に上中下寺町を加へ城下町とせり福島城下より移住するもの多しと傳へり

藩主時代市政は町奉行の管理にて町奉行壹人手代二人着役二人間役五人町同心四十五人手代以下と町口三任せ町年寄三人又は五人町名主十三人又は十六人各町に組頭一人苑大仲使を置かる

明治四年六月區戸長の制を定められ高田町を第二區と稱し始て正副戸長を置き市長をして兼勤せしめ其七月高田藩を廢し高田縣と改稱又十月高田縣を廢し柏崎縣を置かれ所管下となる五年二月各區に正副戸長を置き其八月區画改正更に大小區を置かれ高田町を第十八區十三小區として大區長の下た小區に惣代戸長各一名副戸長若干を置く六年五月柏崎縣を廢され新潟縣治となり七月正副大區長惣代戸長等解任第十大區を七大區に改稱九月新所轄は區劃改正十三大區百廿七小區に劃替管内總區合〆廿五大區二百廿小區に確定し此改正高田町は第八大區小二三四五の四區となり各區に戸長を置き其下た用掛若干名を置かれ年金五圓宛支給八年五月從來の組合を改正更に十七ヶ組となし各組に用掛一名宛置き年金三十圓宛支給其八月戸長を小區長に用掛を戸長と改稱し高田町を數ヶ組に改正し各組に一名を置き九年七月從前の小區長を廢し更に正副大區長を置かる十二年五月正副大區長を廢し中頸城郡役所を高田町に假設（下小町）十三年二月從來の組合を廢し戸長十三名を置く其格は準等外吏にして年金三十圓支給十七年八月戸長を廢し高田町を二分し北は下紺屋町に戸長役場を設け廿四ヶ町二ヶ村を治め南は府古町に戸長役場を設け廿三ヶ町二ヶ村を治む廿二年三月町村制實施に付下紺屋府古町の二ヶ役場を廢し更に高田町役場と改稱し吳服町舊町會所邸へ建築し此れ現今の役場なり星移り年改まり維新の御代となり歐米各國の文明輸入し漸次商家店頭に歐州の物品或は玩弄物を陳列し競ふて新奇を爭ひ從來の風習一洗せり或は所々に煉瓦の烟筒を設くる製造所あり汽車は南北往來し瀉笛遠近に響き黑烟は市街の天に横たはる其繁盛昔日に倍せり

高城村は明治三年十一月高田藩に於て士族をして隣里鄉黨の交りを厚からしめ高齢の敎を重ずる事を知らしめんと欲し藩内を分ち麟鳳龜龍の四大區四十三小區とし其區画を定め西門（舊城大手門）より以北を麟の大區とし十一小區とす西門より以南を鳳の大區とし十六小區とす五分一を龜の大區とし四小區とす川外一の橋川西を云ふ一圓及關町裏迄を龍の大區とし十一小區となす四年六月麟鳳龜龍の三大區を第一區とし龜の大區を第三區とす各區に正副戸長を置き別に副戸長をかす戸籍官吏をして正副戸長を兼勤せしむ其十一月高田縣を廢され柏崎縣治となる五年一月第一區川内川外關築三十九區第二區を四十區第三區五分一を第四十一區と改正し其二月各區に正副戸長を置き高田藩制定の麟鳳龍龜の各小區を廢し外馬塚外四十八ヶ町を改正し其町名を擧れは外馬塚、内馬場、應都屋、蓮池、蓮池横、紀伊國、紀伊國中、南出丸、北出丸、馬場先、南會所、樊形、木築、作事、西會所、西會所通り、岡島、主水、新中殿、中殿、中殿通り、中々殿、川原、表川原、新川原、裏川原、六軒、四ノ辻通り、南土橋、北土橋、新土橋、馬出、一ノ橋、東二ノ辻、西二ノ辻、三ノ辻、新四ノ辻、幸橋、南五ノ辻、五ノ辻、北五ノ辻、六ノ辻、五分一壹、五分一貳、五分一參、五分一四、五分一五、五分一六、とす其八月區画改正更に大小區を置き舊藩並高田町は第十大區の内に入る又改正に依り第三十九區の内川内は第十一小區となり川外は第四十一區五分一を第十二小區となる六年六月柏崎縣を廢し新潟縣官轄となり更に第八大區小一區となり一區内一番より十六番組迄各用掛一名を置き八年八月戸長を小區長に用掛を戸長と改稱せられ十六組を八ヶ組に改正し一組に戸長一名宛置かる九年七月從前の小區長を廢し更に正副大區長を置かれ十二年五月正副大區長を廢し郡役所を創設せらる十七年九月戸長を廢し更に岡島町外四十七ヶ町戸長を置き役場を新中殿十三番地に設置後ち櫛神社東務所へ移し現今の地なり

官　衙

高田區裁判所　明治八年八月新潟縣裁判所支廳を高田上職人町へ創置舊觸元役所頸城郡管轄現今中東二郡九年三月火災に罹り東本願寺別院を假廳とし移轉其十三月舊邸へ新築落成移廳となり十二年新潟始審裁判所高田支廳高田治安裁判所と改正廿三年高田區裁判所新潟地方裁判所高田支部と改稱せらる構造は雪國に稀れなる瓦屋にて人目を引けり門に入れば松樹蒼々として翠色を呈し民刑事の訴訟は繁忙にして代書人は筆の頸禿に至るを知らす三百代言口を極めて巧みに辯し東西に奔走し日當と分一を貪るに忙はしく法律の規定に依り免許代言人の出廳するや三百代言色を失ひ旅舍等へ奔走し百方周旋するも免許者に厭せられ其利を得る能はす數月にして跡を絶つに至れり又法律の變更に依り代言人を辯護士と改稱其免許者の續々市街に來り開業するもの十數名の多きに至る實に當地方の訴訟事件の多きを知るべし

高田警察署　明治四年十二月柏崎縣高田取締所を上職人町舊觸元役所へ創立庶務總訴租稅土木會計の五課を置かる之を最初とす六年六月柏崎縣を廢され新潟縣高田取締所と共に庶務以下の五課分割となり獨立の司法行政の警察所と變遷せり其七月下小町石津控家へ移轉十二月第五號出張所と改め十年一月高田警察出張所となり其二月標記の如く改稱茲に於て一般警察署と名稱するに至れり六月呉服町舊町會所跡へ新築移轉十六年十二月高城村字一ノ橋へ新築移轉現今の地なり地所は有志者の寄附する所建築費は地方稅を要せり樓上に火の見を設け半鐘を供へ非常警戒に便ならしめ此警鐘に接するや市内消防夫は纒或は火防具を前後し現場へ駈附消防に盡力せり三十二年十一月市民有志者の寄附にて石垣及び架橋し出入を便ならしめ且つ景況を改めり又關下紺屋鍋屋の三區に交番所を設置し市内及び舊藩内を時々巡回警戒せられ盜難の患なく庶民皆腹し天恩の忝なきを拜謝す

登記所　明治十九年法律發布に依り財產讓與より金錢貸借上に至る迄登記を受くる事となり裁判所内に登記所を創設せられ當時代書人は圖らざるの收得あり官衙の多忙なる事創始に依り字番號或は名字誤謬等に因り戶長役場或は收稅署等へ臺帳照合の爲め一事件に數日を費すありしも漸次其患なきに至れり又高田のみにては人民の不便尠少ならざるより直江津柿崎飯田除戶等へ出張所を設置せらる

高田稅務署　收稅事務は郡衙の管理たりしも行政の變更に依り明治廿二年七月高田收稅署を上職人町三館控家へ創設國稅事務を掌り又官制の改正にて三十二年高田稅務署と改稱せられ三十五年五月高城村字西二ノ辻現今の地へ移轉せらる該署は瓦屋にして美なり其建築は有志者の設立する所と云ふ

高田分監　高田藩監獄は府古町東裏にあり明治四年七月廢藩高田縣となり高田監獄と改稱其十一月高田縣を廢し柏崎縣となり監獄も亦改稱六年六月柏崎縣を廢され新潟縣となり現今新潟縣高田分監と改稱せらる囚徒服役再三變更し三ヶ年以内となり其以上は新潟本署へ送致せらる從來の監獄にては不完全なるを以て十六年高城村字新中殿へ新築移轉則ち現今の地なり隣字中殿通りに官舍二棟を建設し一は署長一は看守長等の官宅に充らる囚徒の作業は種々ありしも時々改正し大もなるは麻裏草履燐寸箱大工差物木挽機織裁縫の類と聞く囚徒は百名以内なるも十二月より翌年三月の間は雪中の花燭遊の徒多きに至り百名以上に至れりと云ふ

◎高田富史　初篇　（官衙）

中頸城郡役所　維新行政の變遷に依り明治十二年五月郡衙を高田下小町石津控家へ假設其十二日開廳せられ郡面積七十八方里戸數三萬七千百十七人口廿一萬八千百廿五、十八年七月火災に罹り寺町善行寺へ移廳其八月高城村字西會所通りへ新築移轉此れ現今の地なり構造は平家と二階建の二棟とし樓上は會議場と爲し門扉は洋風白ペンキ塗にして美なり其上に洋燈を掲げ番内の咽喉にして甚夜人跡を絶たす高城尋常小學校と相對せり郡衙内に設置せらるゝもの左に

新潟縣第四區土木工營派遣所　土木事業は郡廳の所轄なりしも事業の擴張に伴ひ明治廿三年四月郡廳内に前記派遣所を創立し縣屬或は技手の在勤となりぬ三十七年更に郡内に官衙を建設せられたり

第九盤種試驗所　養蠶事業の隆盛に至り試驗所を明治廿八年八月開始となり黨種改良好結果を得ると云せられ博愛社と名付府縣に地方委員を置かれ十九年十一月取扱所を置かれ又社員を募集の達示あるや入社を請ふ者增加し現今總數三千二百四十八人なりと聞く

日本赤十字社　明治十年西南の役に際し戰地の負傷者病者を彼我の別なく治療愛護するの目的を以創立

日本武德會　明治廿八年武德殿に於て武德祭を創設せられ武道を講演し武道を永遠に傳へらるゝにあり毎歲武德祭に全國の武藝者を會せしめ奬勵せらる府縣知事を委員長とし郡區長を委員とし其十一月取扱を開設せらる募集に應する者續々申込あり三十八年より取扱を警察署に移され現今總數二千八百七十六人に至る近頃新潟市に支部設置せらる

振武會及弘武會　舊藩士と高田町有志者諸氏と振武會なるものを設け子弟を奬勵し國恩に報せんと欲す此擧を嘉し賛同する者續々あり因て明治廿七年五月高城村字岡島廿番地に事務所を設立し射的場を金谷山麓に建築し其十一月競点射撃會を開くに至れり中學校教員諸氏も之を贊し生徒に射的を訓練し大に得る所あり尋て師範學校生徒等も加入せり尚弘武會を起し高城高田近郷の有志者をして滿十七歲以上の男子を以て組織し軍人及び學校に賜りし　勅諭勅語を奉体し國民の義務を尽すにあり會場を郡衙内に仮設し三十三年十一月發會式を擧行せり

高田町役場　高田町に沿革にあるか如し明治廿二年四月町村制實施に依り各町名を廢し高田町と稱し舊町名を大字區とし其服區に役場を新築現今の地に移る此際高志村大字木田新田の内六戸空屋敷一戸及び西村は從來獨立村なりしか高田町へ編入となる計反別三百三十五町一反五畝一歩地價十九万千三百五十圓七十錢五厘戸數四千六百五十四、人口二萬〇五百十四、別院前相生町を金谷村へ陀羅尼新田の内池田町を高志村へ高田廻りの内柳堤を高城村へ編入せらる

高城村役場　高城村字岡島神社境内にあり前の沿革の如し明治廿二年四月町村制實施に依り岡島外四十七ケ字に高田城高田廻りの内柳堤出丸新開土橋府古町裏馬塚新田と合併し高城村と改稱せり計反別二百七十二町二反六畝十三歩餘戸數七百八十六、人口四千二百七十一、

高城村衛生組合事務所　傳染病豫防法に關し村長の官理せしを更に衛生組合規則を發布せられ前記事務所を役場内に設置し翌二十年三月該規則に依組合規約を編成し本村四區とし每區に委員一名宛組長一名を置清潔法施行或は傳染病患者に就き委員持區内を巡回し豫防法注意を申告し或は組合衛生談話會を開

き隣里互に注意し年々該患者減少せり各自の注意と係り員の尽力に依れりと謂つべし

郵便局　明治六年呉服町三國屋へ遞信局出張所を創設せられ郵便爲替金取扱はる九年三月火災に罹り中小町秋山屋へ移轉尋で呉服町長澤屋へ轉局となる現今の局也廿九年九月二等局を三等局と改正し直江津郵便電信局に屬す最初は脚夫の到着を待ち發送故日に二回たりしが信越鐵道連絡せしゑ五回の配達と也便言ふへからす朝に東を發し夕に發信を得るに至れり特定三等郵便局と改稱三十九年せらる電信局明治十四年五月下小町六月一日高宮澤屋へ創立せられ十九年九月郵便局へ合併し郵便電信局と改稱となれり亦該稱を廢し郵便局と改稱せられ今や全國山間僻地と雖も郵便の遞せさるはなし電信は一瞬時に信を百里の外に通し平時に在ては相場の損益を爭ひ戰時に在ては利害得失を報するの迅速なるは之に越す器械なし其得る所大なるべし又歐米各條約國に發する郵書も内地の郵税にて萬里の遠きに至る電信の如きは海底線の設け在て派遣公使官或は商社等の座じて往復を得る實に驚くの外なし二つながら貴賤とも昔く鴻恩を受く其益古人の夢にも知らざる所也

高田停車場　信越鐵道布設に際し本誓寺前に停車場を創設し輕井澤より直江津間に鐵路を開始せらる實は明治十八年五月なり天下無双の難工事太田切埋立は一時中止し田口より以南輕井澤關山以北直江津の前後より超工じ漸次運轉を待ち埋立も竣功に至り直江津より輕井澤へ連絡せしは二十一年十一月なり是に高田を發し夕に東京に着す迅速なる事鳥翼も及ばす此れ文明の脚夫と言哉停車場前旅舍茶店極比し乘車人の取扱は懇篤にして衆人の知る所なり又客待の車夫は乘車を進むるも他驛と異り規律在て雜沓を極めす旅客の喜ぶ所なり

學校　[illegible]

高田町第一尋常小學校　小學校規則に依り高田町を五區に分ち春日呉服敬儀中屋敗陀羅尼と五ケ所に創設す其當時は教育の何たるを辨知せす懇篤諭示奬勵ありしも入學生も僅々なりしが世の開明進歩に伴ひ年々入學生を增加し學區の變更に依て春日校を廢し呉服校へ中屋敗陀羅尼の二校を敬儀校へ合併せらる交運の隆盛に從ひ父兄たる者子弟を嫌難し子弟たる者も學業を勉勵せざるを得す年々歲々入學生增加し第一を春日區に第二を長門屋に校舍新築の工を起し廿八年其十一月落成移轉し高田町を二分せらる本郡内小學校にて四月[illegible]両校の右に出づるなし

高城尋常小學校　學政に依り明治六年十月岡島に假設舊修道館岡島小學校と稱す九年三月火災に罹り校舍悉皆燒失一時寺町淨光寺其外三ケ所に分校を設き開校せられ舊藩主榊原公及藩士等の寄附金を以て翌年校舍落成し茲に移り廿五年六月前記の如く改稱せり本校は舊藩士子弟の教育する所なれば本郡小學校の模範となる位置に在れば校長教員諸氏の教育宜敷を得近郷より入校を請ふ者年々增加せり

因に記維新前倉石典太宮川頼安等私塾を開き舊藩士子弟を養成せられ維新改革の當時兩門生より要路に登庸せられ或は學校教職員等に聘せられし者多し

高等小學校　學政の變更に依り明治廿年五月郡立高等小學校二階建新築舊大手前落成茲に開校廿六年中學校跡へ移轉又學政の變遷に依り一町七ケ村組合立となり月に年に進歩し社會の又學問の必要を感し入學生の增加するを見るに至り三十二年五月二階一棟を增築せるも尚ほ狹隘を告げ又學政の變更に依り三十七年三月組一

合立を解き其村内に高等小學校を建設する事となり高城村は小學校邸内に新築高田町は高城村字西二ノ辻に宏壯なる校舍を新築となり則ち現今の地なり

因に記當校は明治十一年九月十一日　今上皇帝陛下北越　御巡幸の砌り忝も模上行在所となり御駐蹕在らせられたり其後　玉座を校堂となし御眞影を奉戴せり

高田中學校　明治七年五月高田藩修道館元領奉行邸高田中學校と改稱し新潟縣第四分校とし英語學を教授す之を本校の創始とす九年三月火災に罹り寺町長遠寺を借りて開校十年一月公立變則中學校となり英語數學漢學の教授す其六月下小町石神控家へ移轉十一年五月公立學校開業許可となり其十月岡島町へ校舍新築茲に移る十四年十月普通中學の教則に改正せられ十六年七月文部省達し中學部教科書に照準校則を改正爾來屢々の變遷更に營舍を本村字馬場先に九千八百五十餘坪の敷地を買収し本館二階建特別教室体操場通學生控所宿舍二階建其他合計千九百十八坪餘窓は総て玻璃外部は栗色ヘンキ塗門は洋風柵を圍繞し門内には門衛ありて生徒の出入を改め夜間は舍監巡視し室内を調査最も嚴なり三十年三月建築起工し三十一年四月落成其五月開校の式典を擧け新潟縣立高田中學校と改稱せらる

明治三十五年五月　東宮殿下御見學の爲め東北十縣下へ御巡行の際其廿九日當校へ行啓在らせられ各教室生徒授業及体操撃劍等親しく御巡覽の光榮を賜り生徒學力其他種々御質問在らせられ加之金員を賜り恩賜の金圓を以て年々優等生に賞品を與へらる

高田師範學校　社會の隆盛人智の發途年々追て進歩教育益々進み山間僻陬の學校と雖生徒の增加に至り本縣下千八十餘の小學校に教員を滿足せしむる爲め先きに新潟に師範學校を創立し教員を養成せられしも年々得る所の卒業者を以て配布せらるゝも到底一校の卒業者にては滿足なし難きより第二師範學校を高田に增設となり明治三十二年三月寺町本誓寺へ仮設入學生八十名募集應する者百餘名級第者七十餘名其四月開校擬劍教員も聘せらる高城村字四ノ辻通り中殿通り川原中々殿の四ケ字内一万四千五百四十三坪餘敷地買收し其七月起工し三十四年本館落成茲に移轉附屬小學校男生昇降口女生昇降口扣所を異にせり本校と共に宏壯なる建築にして其坪數二千二百三十三坪餘と云ふ北に當校あり南に中學校東南隅に農業學校東北隅に高等女學校中央に高城高田町兩尋常小學校高陽女學校訓矇學校等の數棟舍あり加之上越婦人教會上越婦人修德會高田教會等の設けあり實に高田は教育地と言ふも過言にあらず

因に記本校は三十二年春工事に着手し三十五年校舍全部落成を告け其六月十五日落成式を擧行翌日より三日間縱覽を許さる緑門に祝落成をの扁額を掲け校内萬國々旗を吊し又各室に生徒の成績或は書畫諸器械標本類或は電氣應用を施行し説明せらる又廿四孝竹ノ子堀、正行、の母教訓、北條禪尼、其他三四の飾り物等生徒諸氏の工夫に成れり近頃になき參觀人にて三日間に一万人以上に至れりと云

高田農業學校　明治三十二年四月勅令廿五號に依り高城村字紀伊國三番戸へ郡立農業學校を假設せられ生徒募集に應する者廿五名四月廿三日開校の式を擧られ三十三年五月藪野へ校舍建築其十二月移轉となり現今の地たり其業を卒へ家に歸るや實業に精勵し衆庶の模範となり然して農事の改善せざるゝ事多し校舍敷地三千九百八十坪餘棟數大小十棟實有五千三百廿五坪餘田畑苗場試作畑等なり

高田高等女學校　明治三十三年四月寺町善導寺へ假設入學試驗に合格せる者八十名其五月開校せられ三十四年春高城村字表裏川原兩字内四千七十坪敷地を購入工事着手三十五年四月全く落成に至らざるも當學年度より移轉となり尋て七月全く生徒授業開始せらる本校二階建二百二坪餘講堂平家六十坪理科器械四十四坪割窓實習室十一坪体操場附属所九十四坪總坪數七百七坪餘現今生徒補習科寄宿生通計三百二十餘名女子教育の隆盛に至る地方の幸福偉大なるべし此宏壯なる校舎にて教育を受らるは自然と活潑に進み良婦となり賢母となり兒童を教育するは母の任務たる所なり一言一行皆模範となり善良の階梯なり其功績を揚げ國家有用の人を擧げられん事を期して待つべきなり

私立高陽女學校　地方有志者の組織に成り高城村字馬出龍巌精舎を以て校舎に充て明治廿年四月開校の式を擧行せり當校の目的は尋常小學校を卒業し高等小學校に入るの順序なるも家計の爲め廢學する者往々あるを憂ひ月謝を輕減し高等小學校規則に依り餘課に編物刺繍点茶挿花の四課を置き志望者に教授する事となせり東本願寺大谷氏此擧を賛賞し學費として金五百圓宛三ヶ年間寄贈せらる當校の名譽と謂つべし

私立訓蒙學校　旨人矯風研技會員の發起する所にして明治廿二年十月本縣へ請願せしも組織不完全の爲め却下となり再三往復の末廿四年七月許可となり別院前相生町に校舎を設置し廿餘名の生徒を教授せり東京旨臨學校規則に依りしも教授法の完全せざるより教員屢々上京し授業を傳習し且つ讀本或は器械を該校より受理し教授し大に得る所あり現今授業する所是なり不幸にして旨目の子弟ある者は當校へ入校せしめ普通の學力を修めしむべし一度參觀し其實況を見れば感賞の外なし當校の美擧を賛し資本金を增加し東京旨臨

上越婦人會　高田高等女學校内に明治三十七年十月設置せられ是より先き教育會女子部三十五年十一月上越婦人教會廿四年四月上越婦人修德會三十二年十一月等の設けありて三輪田櫻橋の兩女史を招待し女德を修め婦人の模範たらしめんと養成する目的を以て講話演說等ありしが先きの師範學校長武井彬四郎氏東奔西走盡力の結果合同し前記の如く改稱せられ會員三百五十餘名尋て時局に關する臨時事業趣意書を會員に發布と與に町村名字に委員を設け出征軍人歡送迎或は留主宅を慰問し其情況を幹事長に報告し又戰死者の葬儀に會葬し弔詞香奠等を代表し呈す其勞を取らる其趣意書を記さんに

臨時事業趣意書

露國との戰爭いよ〳〵進み陸海軍ともいつも大勝利との知らせに過ぎて安心して暮して居ることの出來るのは申上げるのもおそれ多い我が天皇陛下の御威光により奉るとは申しながら又我が忠勇無双の軍人方が二ツない命を毛よりもかろく思ふて戰ひ一筋に君のみため國のためとたつくし下さるによる事でこれは御同樣我等國民が朝に夕にありがたく深く感じて居るところであります

たもひまするに道にはつれたの露軍を遠く滿洲の地から打拂つて東洋の禍を根たやしして二ツは隣國のためにし一ツは國家の威光を外國にまで輝かして　陛下の大御心にこたへまつるは實に私ども國民が一般につくさねばならぬ義務ではありませんか然るに我等一同にかわつて此つとめを一身になつて親子兄弟のさきかたい人情をさいて遠く滿洲の野に屍をさらし或は海中の魚腹に其身を葬る事も厭はないで

國家の爲めに盡して下さる軍人の御辛勞は申すもたろか其子其親其夫を送つた家族或は戰死のかなしいしらせに過つた遺族がさびしきとくるしきと又悲しさとに堪へないのをどうして搆はないで居ることが出來ませうまして生活に苦しみ病に泣いて居る人々に對してはどうして知らぬかほに見過ごすことが出來ませうれゆゑ此苦しみをわけて慰めの道を考へるのは實に私ども國民の盡すべき義務でありませうしかも斯樣の道を盡して內は其家族遺族の苦しみ幾分をかろくし外は軍人の元氣を增し且つ其苦勞を慰めるのは實に私ども婦人の本分でありませう

幸に三百人餘りの上越の婦人團体が茲に出來て居ます心を一ッにし力を協せて上越の出征軍人及ひ其家族に對して此道を盡したならば聊其本分に過ふ事が出來ませうかよつて我等會員は出征軍人の送迎戰死者の會葬をつとめ又其家族遺族を弔つたり慰めたりし勤儉力行して應分の御金を出し前に述べた趣意をつらぬきたいのです皆樣の御贊成を得たならば幸ひであります

又特志看護婦人會の設備あり會員六十餘名郡衙內に愛國婦人會新潟支部の設置あり其會員賛助員を併して百五十名あり是時局に關し國民の義務を盡すにあり

高田敎會　吳服區にあり毎日曜に講話を開設し信徒者の外有志者に聽聞を許すも當地方基督敎の信徒微々にして聽聞者も尠なし先きに下小區に基督敎會堂を設け毎日曜日に宣敎師ミリーチン後チフイーチ演說し又字五ノ辻に高田女學校を設立し最初は入學生も增加し隆盛に至りしも該宗の講話は當地方に適せざりしや數年にして廢校明治廿九年となり尋て宣敎師も引拂ひ今や高田敎會あるのみ

神明社　高城村字出丸に鎭座往古下總國結城の城主結城七郎朝光居城鎭護の爲め勸請せられし所結城權中納言秀康卿越前福井城北ノ庄へ移封の際同所へ遷座其後松平越後守光長卿高田へ入部の砌り當地幸橋內に遷座寛文五年震災の爲め社殿大破となり高田城の艮方出丸に社殿造營當城鬼門鎭護の靈社と奉祭せらる

日枝神社　高田町中央に鎭座南府古區より北は土橋東往來橋間の產神とせり大祭毎年五月十五六の兩日神輿市街巡行壯者は繻絆或は手拭の揃にて鉢卷し神輿を昇き字送りとせり各字より山車を出し神輿に先立ち巡回せり市中雜沓言ふべからす昔時より祭典前には必ず鯛漁あり看町より之を神前に供へ祭典を祝するを例八坂神社　直江津町字砂山に鎭座昔時福島城を高田へ移せし以來毎年六月（現今七月）七日高田町へ渡御吳服區四辻の假殿へ七日より十三日迄滯在陀羅尼區より本町通り併勢區迄順次巡行之を表祇園と云ふ十四日東西裏町通り善光寺區より東稻田橋へ渡御之を裏祇園と稱す神輿巡行順序又山車等は日枝祭と同し神輿滯在中附近の露店櫛比或は見世物等毎夜の賑合當地方祭典之に次ぐものなし又十四日は直江津より數艘の迎船を以て高田町東稻田川橋詰に奉迎とし來れり神輿は此船に渡御還行せらる橋上橋下老若男女群集雜沓言ふべからす近頃神輿昇ぎは日枝祭と共に人足となりぬ此夜直江津へ着岸の賑合一方ならす

榊神社　高城村字岡島に鎭座高田藩主榊原公の祖康政公を祀る所なり舊藩士より其筋へ請願し明治八年九月社殿創建する所なり星霜久しからすと雖も樹木蒼々繁茂し櫻花爛熳の頃は殊に觀賞の價値あり又消雪の際

林間より舊高田城趾を望む風景筆紙の能く盡す所にあらす

招魂社　市街を去る西方飯町金谷山の麓にあり戊辰西南の役戰死者の靈魂を祀る所なり金谷山は高田の公園にして春季より晩秋迄は最も賑合り頂上に至れば北海を望み佐渡島は蒼波渺茫の上に横たはり頸城郡は一眸の中に入り絶景なり一轉して麓に至れば割烹店あり浴室を設け加ふるに藝妓を置き興を添へり

因に記往古より向橋村に鑛泉を温め温泉場たりしか維新となり湯谷愛の風宇津等に鑛泉を温め浴場を開き夏季涼納を兼ね入浴する者最も多く共に繁昌せり

八幡社　高田町字直江區に鎮座西往來橋以東稻田橋間の產神とせり往時藩內字矢塲(平)分社弓矢神と尊敬せらる故每年五月大祭の際神輿御藩內巡行を例とせり

八幡社　仝字陀羅尼區に鎮座五分一の兩字の產神とす

春日社　仝堅春日區に鎮座竪横の兩春日藏番上紺屋區の產神とせり

神明社　仝關區に鎮座青田橋以南伊勢區の產神とせり

瓦燒神社　仝新須賀區に鎮座往昔高田城新築の砌り城用の瓦を當地に於て製造せしより瓦燒の名起り此地に石祠あり世人瓦燒稻荷とせり文化年中下小町塚田五郎右衛門なる者中江用水を開通し灌漑の利を起さんと當社に祈願し業成功せば一社を建設せんと誓ひ遂に成功し中江を稻荷中江と稱し或は塚田中江と云當社を江守の神社となし水下各村落の尊敬する神社となりぬ城主榊原公より其功業を賞せらる塚田氏の功偉大なりと言ふべし維新後河波良神社と改稱せり

因記水源は關川を木島より堰上げ矢代川へ注ぎ又今泉地內より矢代川を堰上げ荒町の西を貫通北流し別院の南を經て西中江に合す

佛閣

巨刹大寺盡く寺町にあり著名なる者淨與寺本誓寺を境とす寺院大約七十有餘其他市街に散在せる者十餘淨土宗眞言宗曹洞宗日蓮宗眞宗黃檗宗あり衆人の信仰する所は眞宗を多しとす眞宗寺院必す宏壯庖厨極めて充實す以て其飯依者の盛んなるを知るべし之大師の恩賜なり

淨與寺　高田町字中寺にあり本宗開開寺号最初の靈塲たり初め常州稻田に創立せり其後所々に移り上杉氏招きに依り春日山麓に堂宇を建立し後ち現今の地に移れり明治廿一年五月見眞大師の頂骨塔を創建し側ら納骨所を設置し信徒者の志願に因り納骨せしめ之を請ふ者陸續絶へす大師の德大なりと謂つべし

本誓寺　仝下寺にあり往古井上太郎滿政文武の名將たりしか感ずる所在て下總國布川に於て親鸞聖人の弟子となり釋敎念と改め信州笠原に一宇を造營せり後ち上杉氏招きに應じ越後に移り轉て現今の地に堂塔を再建し移住せり東本願寺連枝地と云ふ

瑞泉寺　仝字横春日區にあり開基善性下總國川邊の圧磯邊に一寺を建設し勝願寺と号す後ち信濃國水內郡常盤の庄に移り慶長年間松平忠輝卿の召に依り當地に移り寺院再建せり越中國井浪瑞泉寺と同系なり

鐘樓　維新再建する所なり釣鐘は舊高田町時報の鐘なりしが維新となり時ノ鐘廢止の際當寺に於て買收となりぬ鐘銘に寛文九年巳酉五月土肥佐兵衛尉藤原宅次造之とあり署名なる鐘にて海上數十里を隔て佐渡沿

音擘を傳へしも高田大地震の時頽落傷を生せしより稀れに佐渡に傳ふと云ふ

別院　仝上寺にあり東本願寺別院なり毎年九月報恩講廿一日より廿七日執行遠近村落の信徒老若を問はず雲集雜沓せり別院前より横區角迄左右の露店見世物櫛比し店々の招聲聒々響き渡り言語を通せざるに至る其賑合言ふべからず

長恩寺　仝上にあり越後中將光長卿菩提所にして天崇院殿の御墓あり世人高田姫樣と稱す現今極樂寺を廢し長恩寺へ合併し天崇寺と改稱す境内に大なる石地藏あり今を去る百十餘年天明年間大飢饉餓莩途に倒る當寺十五世の住職旭導之を憐み市街或は近郷の富家に金穀を請ひ寺内に小屋を掛け大釜にて粥を焚き日々百餘名を救助し遂に寺産を傾ひくるに至り飢人の内死して無縁なるを合葬し石地藏を安置し供養を執行せり其慈善を嘉みし城主榊原公より賞與あり

善導寺　仝中寺にあり開基蓮海文明年中直江津に堂坊造營其後現今の地に移れり毎年三月現今四月十三日高部法會あり稚兒の舞等あり消雪後初めての賑合にて稚兒の舞を見物せんとて兒童を伴ひ詣つる者多し世俗傳へ言當夜は本郡青柳の池より龍燈を献すと云

乘國寺　字藪野にあり開基結城三郎左衛門尉政勝英武たりしか禪法に歸意し一寺を建立し後ち越前に移る又光長卿に隨從し越後に移轉已頸城三島二郡の曹洞一派の總禄となり爾來春日林泉寺と伯仲して本郡の總禄たり

稱念寺　仝中寺にあり開山遊行六代上鎮和尚は常國魚沼郡妻有の庄中條民部の二子之曾根津長福寺但陳和尚の弟子となり一鎮と稱せり其後當地に來り堂宇を建設し西方山無量壽院稱念寺と號す上杉氏堀氏二家より下賜の書類を藏す

日朝寺　仝所にあり往古直江津に在り吉祥坊と云眞言宗たりしか文永十一年日蓮上人流罪免許となり佐渡より歸路の砌り上人に歸意し法名を日朝と改め寺号を吉祥山日朝寺と稱し開基とせり慶長三年上杉氏會津へ移封の際隨行又米澤へ移り吉祥山日朝寺是なり十三世日用上人高祖の舊跡たるを以て上杉氏へ請願し現今の地に堂宇を造營し毘沙門天を安置せり日用上人を中興の開基とす毎月廿五日信徒者の參詣は寺院第一とす最も正五九月の廿五日は世夜人跡を絶たす

慈眼寺　仝所にあり黄檗山第二世紫雲木庵和尚の開山にして基開は中島善左衛門にて稻葉丹後守正通高田へ入部其老臣稻葉勘解由の尽力にて貞享年中創建する所なり

洞仙庵　仝關區にあり寂照山桑樹寺洞仙庵と號す基開の地は三河國室飯郡長澤村にして松平源七郎康忠菩提所なり天正十八年長澤家武州深谷へ移封の節隨從し其後下總佐倉に移り又忠輝卿本郡福嶋へ入部の際隨從し高田城築城と共に現今の地へ堂塔建設永住す忠輝卿斷絶の時深き緣固ある菩提所の故を以て將軍家より御朱印地を賜り松平康忠卿以來の靈牌を奉置せり寺院は矢代川の清流を望み幽邃たる精舍なり

延命地藏　仝下寺長德寺にあり弘法大師の作上杉謙信北堂寅御前の守本尊にて春日山にありしを後ち當寺に寄附せられしと云

淺溪院地藏　同所淺溪院境内にあり昔時出雲町にありしを天崇院尊信せられ地藏に因故ある六道の辻に奠し

[illegible]六ノ辻に寺院を移さる現今の地なり兩尊共眼病者の尊信する所にして參詣者を絶たず其名遠近に顯はる、昆沙門堂は上杉氏陣小屋を其儘に建設せしものにて樣は驚張にして歩々驚歎を發せり惜哉明治三十一年火災に罹り燒失せり境内に忠輝卿の寄附せられし八ツ房梅ノ老樹今にあり

蜜藏院藥師　仝字にあり本郡米山藥師の出張所にして米山寺末蜜藏院持なり眼病患者の參詣を絶たず毎月八日郡集するも四月十月の兩八日の如きは善男善女信徒者雲集し附近の賑合言はん方なし

[illegible]

高田富士　初篇終

◎高田富史　初篇　（佛閣）

六ノ辻に寺院を移さる現今の地なり雨算共眼病者の尊信する所にして參詣者を絶たす其名遠近に顯はる

昆沙門堂　仝上寺にあり元春日山にありしを此地に移し堂は上杉氏陣小屋を其儘に建設せしものにて樣は鷲

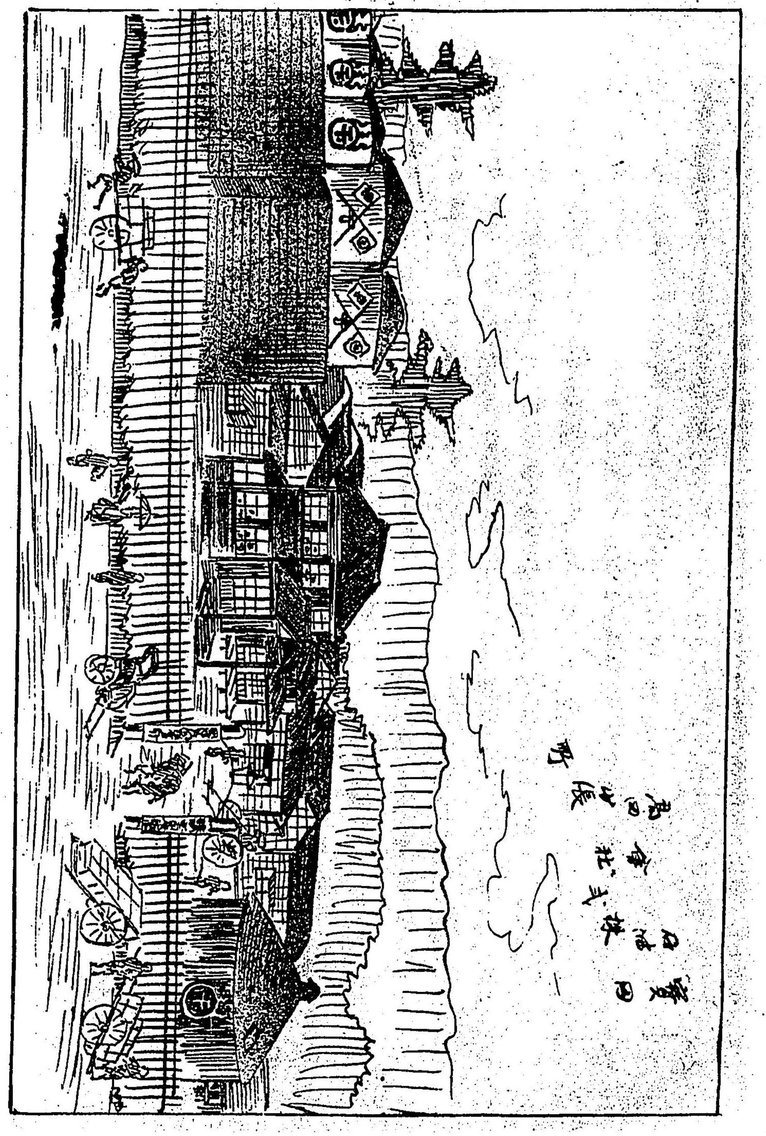
張にして歩々驚聲を發せり惜哉明治三十一年火災に罹り燒失せり境内に忠輝卿の寄附せられし八ッ房梅ノ

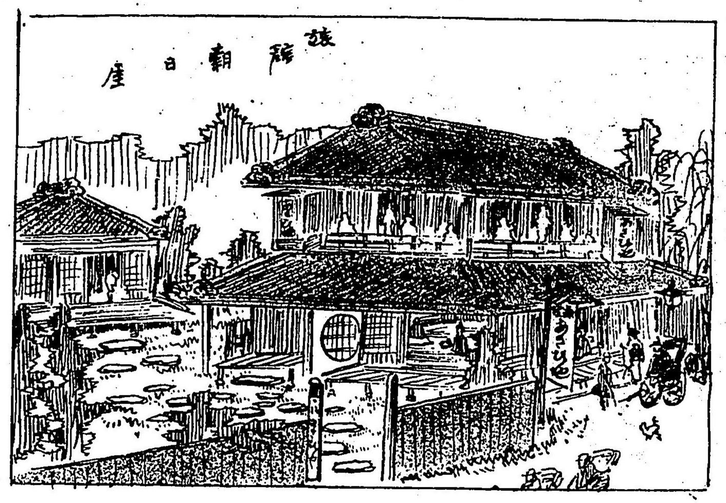
老樹今にあり

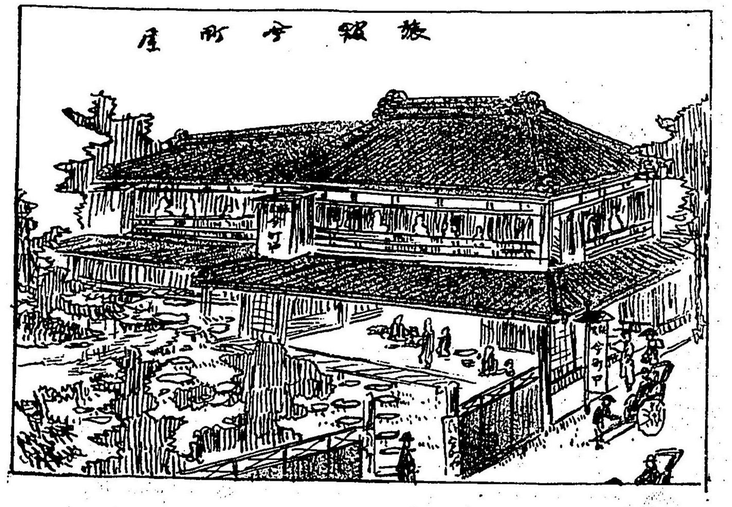
靈蔵院藥師　仝字にあり本郡米山藥師の出張所にして米山寺村靈蔵院持なり眼病患者の參詣を絶たず毎月八

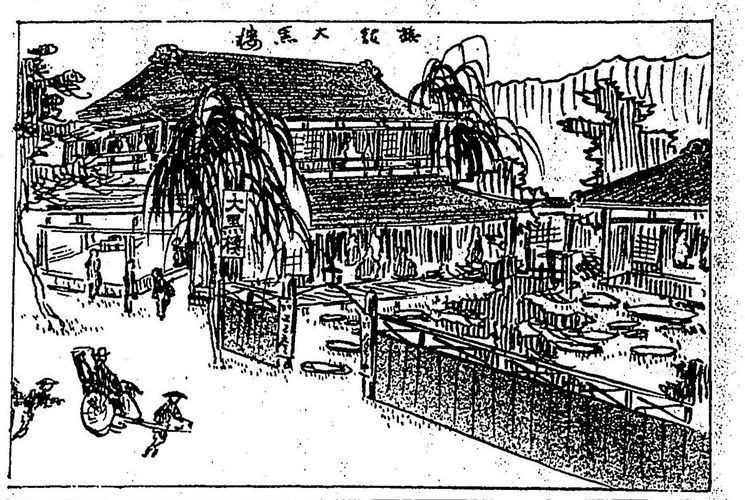
日郡集するも四月十月の兩八日の如きは善男善女信徒者雲集し附近の賑合言はん方なし

高田富史　初篇　終




旅館朝日屋


旅館宇都屋


旅館大黒屋

旅館精養軒

[illegible]

金谷山天鮫城を距る西數町にある燒碩秀山にて男山と女山と二峯に分れたる小峯と雖も其頂に至れば遠く日本海を望み佐渡島は蒼海の上に聳ひ本郡内は眼睫の中に入り風景絶佳なり山腹の堂宇に藥師如來を安置せり其側らに芭蕉翁の碑あり

藥爛は何れの花を草まくら

麓の醫王寺境内の角垂櫻の著名なるあり又招魂社創設以來其名最も顯はる當地方の遊山地にして普く世人の知る所なり

因記芭蕉翁の北越漫遊の砌り病に罹り高田の醫師細川氏に治を需めし時謝みじ句の由茂田祖明川非左琴等の社中にて建つる所又細川氏名は昌庵とて松平越後守藩醫に博學多才歌道を好たり越後家斷絶の後浪人し高田町に住せり雪中の箱下駄は細川氏の足駄の不便なるより考拔發明する者の由此箱下駄高田のみにて他方雪國に傳はらすと翁の日記に見へたり維新後裁判所警察署等へ在勤せらる嗟國人の感賞せらるゝ所也

巴御前墳墓　高田城外東方數町字三丁寺稻荷境内にある古墳なり巴義仲亡て後越後友松に隱る鎌倉に召れ後ち義盛の妾たり和田氏亡て越中友杉に遁れ石黑某に寄り八十餘歲にて沒すと其友松友杉越後又越中と云往古善提久原より籟非島田岡原の諸村を友松と字せりと口碑に傳へり明治初年巴の石碑を他へ移し其後相包

保坂氏の庭前に移し今尚ほ存す

馬塚　高城村字馬塚にあり往昔上杉謙信信州川中島合戰より富倉を經歸城の節此地に至り乘馬斃れ因て埋葬せられしより馬塚と稱せり後ち一祠を建立し馬塚稻荷と稱せり

地藏宮　高田城東南隅字藪野にあり或は地藏の森とも言ふ永祿四年八月上杉氏川中島より歸城の際從臣地藏兵衛なる者扈從し來り俄然病を發し死せり公之を憐み茲に葬り石地藏を建立せられしより地名となりぬと傳へり

扇橋及燕子花　馬塚より地藏宮の往來乘國寺前通りにあり高田城建築の砌り矢代川を切替せし跡沼池にして越後侯在城の頃沼池へ燕子花を栽培せられ開花の時紫花の清水に映して其景狀騷客墨人をして一度茲に來らしめは終日歸家を忘れしむ扇橋は其小流に架する石橋にして其形ち扇の狀なるを以て此名あり現今は良田と變じ其風情なし雖も妙香蓮波の諸峯を望むの景は今に存せり

大杉　上寺總持寺の境內毘沙門堂の側らにある大樹にして幾百年を經しや知る者なし毘沙門の大杉と稱せり廻り五丈餘立さ三十間以上三里遠隔の小出雲坂にて之を望めば諸木に拔き出る事數間又東頸城郡杉坪日光寺の天狗松と共に著名にして驅人の狀を曳く者多し

猫俣塚　高田城外廓土橋口にあり天和二年二月二日本郡桑取谷に猛獸出で人畜を害する事甚し村民城主に訴へ猛獸を狩立て丶其六月廿五日遂に狩出し先手なる中野俣里正吉十郎に飛掛りければ直ちに組付終に組伏せ所持せる短刀にて刺殺と雖も猛獸の毒氣に當り其場に即死せり猛獸身長四尺八寸鼻尖より耳に至る一尺八寸牙上下共に八寸全身五寸の長毛を被り其色赤黑にして彈丸通らず俗に呼び獅々或は猫俣と云死体は其筋の檢使を受け外廓土橋口に埋め目標として板木を植ひ吉十郎の勇名を後世に傳へ後ち側らに一祠を建設し土橋稻荷と稱せり板木は十四五年前に枯れ今はなし

銀行

百三十九國立銀行　高田町呉服區にあり明治十一年十一月資本金拾萬圓の銀行を設立せんと舊藩士の祿券を募集し其條例に依り請願し現今の地に開始す之を高田にて銀行設立の嚆矢とせり時勢隆盛に伴ひ金融頻繁となり再三の增額にて一百万圓の資本金に至れり直江津町刈羽郡柏崎町等へ支店設置せり三十二年株式會社百三十九銀行と改稱す國庫金取扱は元の如し

成資銀行　字上小區にあり明治三十一年開設し社會の發達に伴ひ金融頻繁となり屢々の增株五十五万圓の資本となり業務擴張（潟町竹直）支店の外東頸城郡釜淵へ第二の支店を設置するに至り益々繁盛なり

高田貯蓄銀行　字府古區にあり資本金五萬圓を以て明治三十三年四月の開始尋て業務隆盛に從ひ五万圓を增額し各字內に貯蓄金取扱所を設立せり

直江津商業銀行代理店　仝中小區にあり明治廿九年十月開店貯蓄と當座預りを專務とし本店は直江津町にあり近頃字鍋屋區に第二代理を增設し業務擴張益々隆盛なり

協盛社　往古より酒造醬油搾問屋魚問屋髮結湯屋等は株と稱し制限ありて其他に營業する能はす明治維新となり諸株の制を廢され人民自由の商業を得せしめらる上下兩田端町從來の魚問屋を柏崎縣廳へ出願許可を

得濱方と規約營業し羅賈何人にても自由に買收する事を得せしめ其後濱方と葛藤を生ずる事數年明治十六年四月赤木義彦氏高田警察署長和解の勞を取られ其結果協盛社を創立せり廿六年商法條例發布に因り資本金四千八百圓とし上下兩田端に居住者協同し株式協盛社と改稱し下田端區三十一番戸に設置し純全たる會社となり之を田端銀行と云他方へ貸與せす魚類買收の資金とするにあり

會　社

內國運運會社　高田停車場前にあり貨物運送取扱保險貨幣早達便運送物前貸を以て目的とし本社は東京日本橋區にあり宿驛問屋傳馬所取扱人維新前五幾七道宿驛人馬繼立所を問屋と云　飛脚運の協合にて陸運會社を高田中小町に創設し貨物運搬等に從事せしは明治の初めなり營業隆盛となり九年に至り官廳の許可を得資本金十五萬圓其後增加し一百万圓となりぬ信越鐵道布設に至り運運開運秋山運送の諸會社等共に開業せり尋て稲屋區に高運合資會社の開設あり信越鐵道連絡以來貨物運搬頗る頻繁となれり

高田織物會社　大野正氏は舊藩士にして廢藩の當時感する所あり武州八王子機業家某方に入り刻苦十數年業成り歸高有志者と謀り字西會所通りに工場を建設し大野女工場と稱し工女を募集し百餘名の工女を得月に製する羽二重千四百疋以上に至り製品は横濱へ送致し海外輸出となれり初め獨立たりしも現今株式會社とし標記の看板を掲けり事業を擴張し工場を更に新築改良し二百餘名の織女を要するに至れり

因記明治三十五年五月廿九日　東宮殿下高田中學校へ　行啓の歸路工場へ　御立寄御巡覽の後工場外庭園に假設せる自働防火扉大野氏發明を　叡覽に備ひ下扉は自働して閉塞せるは攝氏六十度に於て熔解するものにして輕便なる器械故都下の如き火災多き地方は最も必要なりと云

高田機業會社　當市街へ輸入する綿フラン糠尠少ならす此業を起し物產を開始せんと有志者の計畫に成り長初字尾張に工場を假設し尋て新職人區に移し織女四十餘名已に製品も本場と同品位に至れりと發起者織女共奮勵益々隆盛に至れり方今一ヶ月の製造品綿糠風通浮織赤縞等通して千四百餘反以上に登りしが可惜障害の爲め中止の逆境に入りしか近頃工女を募集し居れりと聞是より先き東京の人加藤某の織繼する所と云

高田製糸會社　當地有志者の發起に成り養蠶の開道けたるも未だ製絲場設立なきを遺憾とし關區洞仙庵隣地に器械場を建築し二百五十馬力の器鑵を据附け女工百餘名を以て製絲し之を横濱商店へ輸出し事業擴張し舊に倍せりと聞く

高陽燐寸會社　當地有志者の成立にして製造場を横春日區に建設し高燈社と稱せり其後倉石知藏氏外數名にて繼續し製造場停車場附近に移し社名を前記の如く改稱し新器械を据附け一ヶ月の製品高一万グース以上に上れり其四分ノ一は信州地方へ輸出し隆盛に至れり

佐藤織物合資會社　全鍋屋區にあり高田地縞木綿販賣開業し從來舊藩內婦女子の地縞木綿を郡內其他各地方へ賣捌きしに正確と廉價等に依て販路擴張せるを以て明治三十三年表記の如く改稱せり之に倣て各所に同業者を增加し結社するあり獨立あり兎に角高田縞とて各地方へ輸出する產物となりしは喜ひしが近頃解散し煙草製造所と成り時勢の變遷に依り機に乘し利害を謀るは商家の長も貴重する所なり

高田女工場　木戸氏初め横濱に於て「ハンゲチ」製造に從事し當地に來り字西會所通りに工場を設立し尋て吳

服區に移り百餘名の女工を以て製品を横濱に輸送せり製品地は羽二重の長さ尺四五寸以内なるものに花鳥其他種々なるものを縫取り美麗なるものなり濱より歐洲へ輸出品となれり「ハンケチ」「バテン」等の製品の嚆矢とせり現今上職人區に移轉し爾來百事改良合資會社となり金丸支店作業部の票札を掲げり又呉服區に瀧野氏本誓寺前に飯島氏等あり共に繁昌せり

レイス工場　柴田氏の開業する所にして高城村南土橋にあり五十餘名の女工を以て製品を東京へ送致せり二つながら婦女子の仕事に適當なるを以て繁盛なり

高田染織講習所　高田地縞木綿確實と正價を以て賞せられ販路擴張するに從ひ之に倣ひ同業者を各所に出すに至り商業上競爭の結果不正品製するの恐れより織物組合長廣瀬新兵衛染物組合長今井清藏所長小川吉信諸氏其他有志者東西に奔走し組合を協同組織せんと計畫の折柄明治十八年本縣布達せらるゝ共同業組合準則に依り本郡を一區域とし織物製業者を以て高田織物組合を設置し其筋の許可を得次て染物組合を合併するに至り卅四年四月更に出願許可を得其六月高田染習講習所を高田町字直江區に假設し更に該講習所を高城村字五分一に建設し又補助金下賜をも請願許可せらる此建坪七十五坪之を二分し一を織場一は染場とし二階を教室と製品陳列所に充つ十一月移轉當時の織物「ジャカト」風通ウキヲリ「シボ」チヽ「七ヽ子」唐綴の類染場には藍甕十二本を埋め側ら化學染器械と藥品數十種を設備せらる染織技手齋藤辰五郎所長小川吉信書記瀧澤喜太郎諸氏の擔任せらるゝ所なり目下生徒男女通じて十五名毎年一回定期講習として本縣より技師來臨あり建築補助三千圓と一ケ年經費の半額を下賜せらる今や文明の代となり新事業の增設せるは地方繁盛の基にして喜ぶべき事ならずや又綾織の如きは西京に至らざれば見る能さりしは場に望み見るを得地方の人參觀し其技術を見るべし

上越生命保險會社　資本金十万圓を以て字莫服區に創立し尋て明治三十五年二月新築へ移り此より業務一層擴張せり當社は他の會社と異り生存者に限り滿期の後約束金高に應し利益を配當するあり又身体檢査の手數を省き便法なるに依り加名者續々あり當時東京日本橋區長野縣長野市等へ支店を設立せりと聞く三十九年五月日東生命保險會社と改稱せり

明治共濟會社　明治三十四年二月積立金十五万圓とし字上小區に設置し普通生命保險會社と異り共同者相互の共濟を目的とし組織せる會社にして一千五百人を一組と定め其團体中に死亡者ある毎に各共濟者より金拾錢を徴集し其契約金を拂渡す法にして一ケ年間平均死亡者を各月に豫定し人名超過の分は翌月へ回し募集の規定なり又加名者戸主なれば自身及ひ家族の爲めになしたるものと見做し家族の死亡したる時契約せる共濟金を仕拂へ共契約は消滅する故更に加盟する事を得るの便法なり單獨加盟者死亡の時契約金受領と共に契約は消滅せり此二社の外東京大坂地方より支店設立せるもの十有餘あり當時閉社せり

襤褸合資會社　襤褸或は玻璃屑又は古瓶紙屑等を買取し仲買商の取扱來りしを開業者結社し前記の會社を高田町字桶屋區に設置し販路を擴張し京坂地方へ輸出するに至れり回治の御代となり廢物有用品となりぬ

新聞社

高田新聞社　當地有志者協同して善導寺前通りへ創立せり其當時は國事犯高田疑獄の後ちにて社員は東奔西

走し其事實を探知し報導するを以て其多忙言ふべからす其後北辰新聞發刊せしも十數月にして廢刊となり高田新聞益々隆盛三十三年五月五日五千號の祝宴を開き紙面及ひ活字を改良し將來の隆盛推て知るべきなり三十四年十一月上職人區現今の地へ移轉し事業大に擴張せり

越後日報社　衆議員議員選擧に先き立ち自由派機關新聞を發刊し高田町字府古區に創立し越後日報と開社し明治三十五年七月十日第一號を發行す伊藤板垣両侯其他貴顯紳士の祝詞祝電等にて三頁を餘すに至れり盛んなりと謂つべし進歩派高田新聞と往々競爭筆戰する所あり此競爭は社會の大に注目する所あるへしと世人の想像果せる哉毎紙互に筆誅し社會の笑を受くるに至れり其後惜哉廢刊せり

病　院

高田病院　明治五年有志者の私立病院を創立せしを病院の端緒にて八年五月郡補助となり高田病院と改稱し稻田假治町へ新築開業十八年高城村字岡島へ移轉す人智の進歩に伴ひ衛生の必要を感し年々入院患者增加せるを以て屢々改築或は增設し當時は宏壯なる郡立病院となれり

驅黴院檢梶院　郡病院の管理する所にして高田町字横區に設置梶毒を檢査する所にて設立以降該病毒漸々減少し成績を奏すと云

私立知命堂病院　高城村字四之辻瀨尾玄弘氏の邸地に建設する所也氏は地方に完全なる病院なきを憂ひ子弟を大學校に入れ數年計畫し子弟の卒業を待ち明治廿三年春病院建築の工を起し翌廿四年十月落成し其十一月一日開業式を擧行し内科　外科　眼科　婦人科　看護婦其他器械等一ッも備はらざるはなし地方患者の幸福郡病院と共に繁盛なり此美擧を贊賞し舊藩主榊原公より器械數品を附與せられたり氏の功績實に偉大なりと謂つべし以上高田桑に詳也

避病院及隔離室　字中寺一乘院境内に建設せり高田町高城村一町村の傳染病患者を收容する所なり町村長と術生諸員の尽力と各自豫防注意の結果に依り年々該患者を減せり

眼科醫院　眞保利雄氏は舊藩士にて新潟甲種醫學校に入り業成り上京眼科專門井上氏に從學し明治廿二年歸高自邸に眼科醫院を設け治を請ふ者門に滿つ醫術の進歩するに伴ひ書籍のみにては疑議を氷解する能はず因て洋行を思ひ立ち廿九年五月獨逸國へ向け發途獨國「ハイデルベルヒ」及「ウルツブルグ」眼科大學の二校に各一年滯在し尋て「オースタリヤ」國維納眼科大學校に一期日夜刻苦研究大に得る所あり三十三年十月歸國百事改良を加へ治療に從事し益々隆盛に赴けり當地に於て醫術研究として渡航せし者は眞保氏を第一とし瀨尾原始氏を第二瀨尾昌索氏を第三とせり已に　利雄昌索の　兩氏は惜哉故人となり

高田病院眼科主任たりし小島彦造氏辭職後明治三十二年秋眼科醫院を呉服區に開設以降患者門に滿ち尋て眞保氏病に罹り閉院す眼科專門家僅少なるを以て小島氏一層繁盛なり

又田村眞野氏の高田病院を辭し明治三十七年上職人區舊稅務署跡へ眼科醫院の開設票札を掲け小島氏と數歩を隔て開業せらる共に病院出にして隆盛なり

從來婦人科と稱する專門家なく藤林文益氏之を憂ひ專務業成り歸國自邸に開業せらる當時は婦人科と言はす產科と稱せり氏故人となり爾來婦人專門家なく其後高田病院知命堂等の設立あり又小池國三郎氏刻苦業

成り歸國自邸に病室を建築し純全たる婦人科の開業あり地方婦人の爲め大ひに利益を與へられ患者室に滿つ近頃高田病院婦人科專門たりし戸田福之助氏辭職後上職人區に專門婦人科の票札を掲げられ今や二病院二婦人專門家あり難患者あるも他方へ出るなく治療を請ふ事を得るに至れり之地方の幸福喜ぶべき事ならすや

齒科醫院　江川鈴彌氏は舊藩士にて感する所あり齒科專門大家伊澤氏の門に入り業成り福島縣の招聘に應し同地に赴き其後歸高上小區に開業せらる當地に於て齒科專門家の開始なり從來地方人士齒科醫と入齒師との區別を辨知せざる爲め姑息の治療を受け終生不具に陷る者多し氏の開業以來其患なく地方の幸福と謂つべし直江津町の請願に依り出張所を設置し隔日に出張せらると聞く

近頃山本氏下小區に倉地氏横區に齒科醫院の票札を掲げらるあり

因記高田町關醫開業の嚆矢は竹内大安氏嘉永年中下職人町に開始せり當時は治を請ふ者僅少なりしが漸次治療を請ひ隆盛に趣きたり男直與氏海軍に奉職し海軍々醫少監に昇進現今滿期退職維新前藩學生として上京大學東校へ石川仲全杉本直形上野貞齋等の諸氏入校業成り石川氏は陸軍一等軍醫に進み已に石川上野二氏故人となり杉本氏は二等軍醫補期となり歸高自邸上小町に開業現今新須賀區へ移轉之を西洋醫專門の嚆矢とせり漢法醫數家も皆佯法を習ひ漢方專門家は直江區に黑澤宗順上小區に笠島大安高城村字東二ノ辻中川昌義の三氏あるのみ中川氏は斗南舊藩士中川左京氏の令息にて父に從ひ下職人町に開業し後ち現今の地に移れり

牛乳搾取所　社會の進歩に伴ひ各自攝生に注意するに至るも必要なる牛乳を販賣する者なかりしが舊藩士中島氏有志者と協同し邸内に搾取所を建設し洋牛數頭を蓄飼し販賣を開始し高田病院其他の需めに應じ月に年に需用者增加し隆盛に趣けり其後細谷氏の繼續する所となり

高榮社　丸山豊治郎氏は八木某の跡を繼續し舊高田城内に搾取場を移し洋牛數頭を蓄飼し高榮社と稱し是亦需用者の求に應せり此外精養社舊城本丸新潟屋四ノ辻上寺五分一等にあり

因記明治三十五年五月　東宮殿下當地　御駐車中牛乳を御旅館へ納め奉り高榮社の名譽と謂つべし精良なるを以て爾來一層繁昌す

石版印刷所　石版印刷開始の嚆矢は高橋有吉氏の高田中小町に開業せしより各商店の商票注文積堆し工場狹隘を告げ高城村字裏川原へ移轉し業務を擴張せり後ち高田高等女學校敷地となり字四ノ辻通りに家屋建設移轉せし市街にあらざる故注文者の不便に依り當時中小區に移轉と共に工場を改良し一層事業を擴張せり當時同業者四五增加せり

高田活版印刷所　當地に一の活版印刷專業者なかりしが大竹融氏字雨替區に標記の如く開店し諸方の需めに應せしに開始以來注文續々あり職工休業を得すと石版郡治郎氏之を繼續し其求に應せり從前は新聞社或は石版印刷等へ依賴せしも專業家にあらざれば家業の餘暇に印刷せる故遲々に至りしも專業家の開店に至り印刷物に便を得又商家の發達に從ひ印刷物も頗る增加せりと云

高田印刷合資會社　人智の增進に伴ひ印刷物も隆盛に至り明治三十七年春字上職人區に活版石版を併せ前記の票札を掲げ開業せり

交　通

人力車　慈籠變じて馬車人力車となり馬の挽くを馬車と云へ人の挽くを人力車と云ふ油屋德右衛門氏の發明する所なり一人を戴するあり二人を戴するあり迅速なる事一日に二日路を趨る輕便にして且つ廉なるより乘車する者多し當市街各店通じて三百臺以上なりしか信越鐵道連絡せしより追々減少し當今其半に過ぎずと云

自轉車　人力車の歐州へ輸出するや自轉車横濱に輸入し都下に傳播し運轉ヤヽ熟すや人車或は墨堤に至り瀧船と競爭し或は新橋より品川停車場間瀧車と競爭を試み上達者は瀧車より先着する事五分以上場に達すと其迅速なる事羽翼も及ばず近年當市街に輸入し吉田直正氏邸内に自轉車乘り練習所を開設せり紳士より稚兒に至る迄場に集合し中々盛んなり後ち中寺善導寺境内に競爭場を設立し日々午後より技術を爭ふ人々は帽或は服裝一見目票を附し花々敷事なりき當時は該場を廢せり自轉車販賣店は吉休外二三あり爾來市中往來せる者僅見受くるも減少せり又高田より直江津へ瀧車にて十五分間を要するに自轉車にて往來せば普通の用要を辨じ十五分間を費やすのみと其迅速なる事眞に驚くの外なし維新以降瀧船或は鐵道或は電信或は無線電信或は電話或は輕氣球或は「エッキス」光線を以て身体を望見せば内部の筋骨をも透明すと云へり（日露戰役に彼我共に之を空中に上げ敵狀を視察せり）吾人は開明の御代に生存し斯の如き奇術を見聞するは幸福と言ふも尙餘りあり五十年前に黄泉に上りし人に之を冥途土産に語らば魔術と稱し信ずべからず又聞く所に依れば雷話を掛け談話に接し互に面を顯はし語るの方法工夫を凝しつゝありと歐州人は一ッの發明は二代三代を問はず精工に至る迄之を繼承し遂に其功を奏すと果して早曉其成功を見るべし

旅舍　海に瀧船陸に瀧車開け旅客の宿泊も減し從て廢業せし者あり一時は僅かに廿餘戸に至りしか社會の發達に伴ひ交通追々頻繁となり旅舍も增加し方今六十餘戸に至り專業家は四分にして兼業家六分は料理店營業者なりしか法律の規定に依り料理店にて旅亭兼業を廢せられ近頃料理店にて旅舍を區分し營業せるを數家見受く客者の便と言ふべきなり

旅館の最大なる者は茨城三友とす三友館は清香園あり茨城館は停車場前に支店あり

高城館は高城村字新中殿にあり高田師範學校に於て養成せらる講習生の下宿する所にして公認寄宿所の招碑を掲げ館主白川氏の建設にて最も室内空氣流通と清潔及ひ飲食物其他衛生上に注意せりと云

青田川三橋　青田川は高田城外郭たりしも維新後士居も拂下げとなり尋て廢城の命あるや交通の便を謀り有志者の醵金を以て架橋するもの三、一ッを新中殿より東二ノ辻を經て上職人區へ二を木築より北土橋を貫通し横區へ三を尾張より横春日區へ通するもの一を新橋二を旭橋三を春尾橋と稱せり從來の一ノ橋幸橋土橋の三橋を合せ六橋となり舊藩内交通の便鈔少なからす又學校へ通學兒童の歡喜する所なり

寫眞　鹿野浪衛氏の寫場を善導寺前通りに開らくを嚆矢とせり實に明治十七年頃なり尋て沼氏の別院前に又柴田の氏鹿野氏の隣地に開業し共に繁昌す開明の御世となり父子兄弟離散し本邦は更なり歐州地方へ奉職

するあり或は留學するに至り容易に見る事能はす互に寫眞を交換し其無事を祝するより寫を請ふ者多く又藝娼妓の寫を請ふ者は之を四方に謂き黄金郎を釣らんとするの狡計あるのみ一ッは眞情を尽すにあり一ッは私利を謀り一身の安樂を希望するにあり何ぞ夫れ大左なるや嗤

電話　東京府下に於て專ら流行し電話交換所を創立し官衙或は會社商店に至る迄皆之を設備し座して應答懇談する輕便器械にして今や高田市街に電話架線を見るに至る此れ高橋酒造木店より常盤藏木旭藏陀羅尼武藏屋四ノ辻等へ架橋し其便言ふべからす之を當地架設の嚆矢なり近頃當警察署より新潟本署及ひ各分署監獄署等へ架線せらる

上越倶樂部　善導寺前にあり當地有志者の設立に成り宏壯の建築にして席貸を專業とせり從來は公衆の集會所又宴會所に充つべき建物なき故寺院を借り受け集會せしも當倶樂部設立以來衆人に便を與へ先きに柳糸高陽長菱の三樓にて官衙の送迎會所に充つるを得又此の借席のあるありて地方の便利なからす時勢の進歩と言ふべし

高田社交倶樂部　政黨に關せす官民協同し明治三十四年十一月呉服區に開始する所なり同志相會し交通親和を謀るにあり圓非將基書籍新聞等を設備し各好む所に因り獄樂を盡すにあり現今磨部せり

大弓場　舊藩士神岡氏呉服區に大弓場を開き紳士運動の一助に供せり方今別院前相生町に場を移せり近頃中學師範の兩校に於て弓術開始せり學生も亦場に來り試みるあり從て繁昌せり

導場　呉服區にあり倉地正久氏は舊藩士倉地九郎兵衛正義次男なり幼名陽次郎と云幼にして劍術を好み長ゼて同藩士某影流庄田角左衛門貞則の門に入り後奥田大作定行に隨從し業成り武者修行として下越より奥羽常野を經て江府に出で刻苦する事十數年歸國の後導場を開き他來の劍客と試合怠らす維新の際十人口に召出され師範役に列せられ藩士を教授す廢藩の後稻田に導場を更に建設し近年現今呉服區に移轉中學校警察署等の屬托に依り出務本年七十六歳の高齢なる教授に於ては壯年者と異ならす老て益々壯んなりと謂つべし

修武館　は長野市にあり克己氏は同藩士柴田六左衛門良貴の次男なり長兄早く沒し君を嗣ぐ幼名を武四郎と云ふ劍術を倉地正久氏に受く最難劍を得意とし性は卓犖にして人後に立つを嫌ひ事意の如くならざれば腕力に訴ふるに至る隣里呼んで鬼柴田と稱す後國する所あり克巳と改名す戊辰の役組頭番頭にて平士十數名の長となり鯨波口に向ふ又西南の役藩士應募の際三百六十餘人の取締に推され上京尋て三等少警部に任せられ鹿兒島に向ひ戰闘功あり金七十圓を賜る賊鎮定の後國に歸るや益々劍道を研究し遂に上京し山岡鐵太郎に從ひ深く得る所あり後ち長野市に導場を設け門生を教授す現今長野師範學校警察署等の屬托に依り教授の任に當る京都武德會開會毎に長野縣より該會に出場各縣劍客と試合技術益々進む又同志者と謀り中等學校教課目に撃劍を加へられん事を國會に建白す其勇奮武士道の爲めに感謝する所なり既に六十を越て氣力更に減せす身体十八貫五百目以上と云老て益々壯んなりと謂つべし其建白書を左に記す

乞ふの請願某等謀んで書を裁し

衆議院議員閣下に呈す

我神州の國を建つる茲に三千年屹然として東洋に獨立する所以のものは蓋し天祖降臨以來上下武を尚ひ人心一致して國を術し結果なり胡元の宇内を併呑せんとするに方り艨艟巨鎖を戴せ千万の精兵來て西陸に寇す我將卒接戰之を玄海に斃し將虜の心膽をして寒からしむ其後豐臣秀吉一舉三韓を席捲して以て朱明を震撼す我國の武尭に剛なる史乘の傳ふる所歷々徵すべし泰く惟みるに王政復古以來武德益隆り武威是れ揚り東洋の覇權全く我に歸するに至れり是れ固より聖德の致す所なりと雖ども亦我國に固有し尚武の美風に關するものなくんばあらす柳も劍道は我國固有の道にして苟も我國の士人たるものゝ一日も忽にすべき所に非ざるなり況や維新以降各地に戰爭に此術を以て功を奏するもの多きに於てにや且夫れ平素子弟をして此術を講習せしむる時は其手腕を鍛練し其氣概を養成し神州に固有せる尚武の美風を興起する功少じとなさゝるべし我武德會夙に茲に見るあり會員一同孜々奮勵事に從ふものは獨り此會の隆盛を圖るのみにあらすして益々尚武の基礎を固ふし我神州固有の美風を永遠に存し且彌之を發展せしめんと欲すればなり然れども尚武の基礎を固ふし神州固有の美風を存せんと欲する時は國國多數の青年をして此術を講習せしめ劍道の貴きを知らしめざるべからす方今諸學校隨意科を設け劍術を學ばしむるもの多しと雖も生徒皆正科に力を專にするを以て隨意科を修むるもの少なきを免れす是れ深く不肖等の遺憾とする所なり因て更に高等學校師範學校中學校の正科に劍術を加ふるの協贊を得ん事を希望し帝國第拾議會以來每會請願書を呈出せり然るに第拾回議會に於て貴族院は願意の大體を採擇すべきものとし時の内閣總理大臣へ送附せられた

客歲征露の役起るや國國臣民暴て奮然蹶起一死以て國恩に報せん事を誓ざるなし我陸海軍は戰へば勝ち攻むれば必す取る矯々桓々武威を八紘に紘躍し國光を四表に發揚せしもの此れ偏に大元帥陛下の御稜威に由ると雖も亦我祖先より繼承し來りたる尚武銳果の氣風之れが基因たらすんばあらす今や講和條約發表せらるゝと同時に將來我國の任務更に重大を加ふるものあるを見る乃ち國家の進運を無窮に計り國家の威嚴を永遠に保たんには益以て我武士道の奬勵すべきを察するに足るなり希ぐば時局の趨勢に鑑み國家百年の大計の爲めに本議採擇の決議あらん事を茲に別紙豫算概要を附し謹て請願す誠恐頓首

卷煙草　煙管を使用せる慣習變じて卷煙草流行し又喫煙者は其用具を要するなく嬢寸を持ては市街の往來にも喫煙するの輕便なるより日に月に增加し從來の營業者廢業或は轉業を見るに至れり最も人目を引くものは此の目票の右に出るなし今や山間僻地の村落と雖も「ビーロ」「ピンヘット」「オールド」等の看板あらざるなし都鄙の別なく普く派及せしは盛んなりと言ふへし乎中小風間五反田の二氏は大器械數臺を据附け其他二三あり各家の製する煙草は越中或は本縣内各地へ輸出せりと近頃は民業を廢し官業と爲り官業製造となりぬ

小間物商店　人智の進むに伴ひ玩弄物も年々新奇々々と移り變り都下に行かすとも座して流行物を購求する事を得るに至り各商店競ふて招牌を軒下に掲げ人目を引く之商況の一進歩と云ふべし

高田富史　二編　終

高田富史　三編

前二編に漏るゝ所を併記し三篇となし高田維新前後の概況を綴す當地方に昔時より書籍に乏しく遺憾とする所故に口碑に傳ふるものをも書き載せ高田富史全部とし識記者を待ち更に訂正增補し完全たる一小冊子となさん事を希望す茲に素志を陳べ大方の諸彦爾效を垂れ玉はん事を

蚊睫巢遜齋

茶道　藩主時代は老職醫師僧侶市街にては町年寄以上の人々に茶の湯行はれ微々たりしが明治維新となり江戸藩邸より高田へ移住せし御茶道家荒井宗二氏來高より御茶道家齋藤輪市關本某の二氏斯道研究會起り爾來紳士の令嬢令夫人の荒井氏門に入るあり漸々流行し明治十六年方同志者毎月十一日を期し完全なる茶話會とせり尋て利休翁の三百回忌も廿三年に相當せるを以て引上げ善行寺境内に一堂を建立し翁の木像を安置し廿一年四月十九日より翁の三百年祭を大岩精舍に於て營み毎月一回該堂或は淺與寺へ集會せり氏の宅定會日三八と日曜は門人參集其他市内外に招待を受け餘日なしと云已に濕奥を極むる者二三ありと又新潟及柏崎等に於て期日茶話會の招待ありと今や古人となり三上宇一郎氏關區織續教授の勞を取らる

挿花　遠州流貞因齋岡部一操氏を當地挿花の元祖にして門人三百餘人あり其後富岡藤浪波多野堀田長谷川の五氏ありしも茶道と共に微々なりしか茶道の流行に伴ひ挿花も追々回復し神社祭禮等に奉納或は市内所々に數種の花瓶を陳列して衆人の目を引くに至り從て諸商店にも生花を供へ店飾と爲す者あり氏已に古人となり大沼田誠氏代りて教授門生四百餘名に至り盛んなりと云へし高齡を以て三十七年八月黄泉の客となり門生山口一樹氏繼續せり

裁縫　開府の御世と共に市街至る所裁縫の看板を揭けざるなし又山間僻陬の地と雖も咿唔の聲聞かざるなし裁縫も漸々農家婦女子も市街の裁縫家に授業を請ひ又冬期間寄宿し其業を受くるもの年々增加す此れ社會の進歩に依り男子にして普通文字を解讀せざる者なく女子にして裁縫を心得ざる者なきに至らん誠に人智の發達と進昇に依れり喜ぶべき事なりすや

維新前藩内にて和服裁縫は坪五ノ辻に落合二ノ辻に島田の兩氏舊藩士は婦女子に教授維新後となり舊藩士にて河野吳服區に川上下小區に鳥居善光寺區に三氏裁縫所の招碑を揭け共に教授し爾來裁縫の目覺を掛け開業せる者十數戸に至れり

明治の初め洋服裁縫は堅春日區吉田休治郎氏の職工を東京より雇聘し開店せしを嚆矢とせり其後追々同業者の開店を見るに至れり現今洋服裁縫家の增加せる事十數軒となれり

私立女子裁縫學校　高城村字岡島舊高等小學校跡にあり明治三十七年師範學校裏門通りに設立し三十八年六月二十四日現今の地に移轉せり木郡潟町村字土底藤繩正則女子ヒサ地方に完全なる裁縫學校の開設なきを遺憾とし東京本郷區渡部女子裁縫學校へ入校數年勉强業成り歸村するや開校の式典を擧け正則を以て教授し生徒は通學と寄宿の二とし開校以來日淺きも七十餘名内十五名寄宿生あり夏期休暇後十數名の申込ありと聞く校則に依れば教科を普通科普通速成科高等速成科の三課に分てり普通科各一年を前期に分つ前期は四月に始り九月に終り後期は十月に始り翌年三月に終る普通速成科及び高等速成科は四月に始り九月に終る

授業料は普通科一ヶ月金六十錢普通速成科金八十錢高等速成科金壹圓廿錢入學料は各科とも金五十錢の定めなり

裁縫所　横區貸座敷事務所内にあり往古より藝娼妓にして裁縫を得る者稀れにして落籍し一衣だも縫ふ事能はざるを普通の弊習なるを憐み近年都會の遊廓に裁縫所を設立あるに倣ひ前記の如きを設置し教員數名を雇聘し最初は讀物算術習字をも教授せしも當時は隨意科となし縫裁專門とし午前八時より正午迄とす區内有志者の設立にして無月謝にて教授す美舉と謂つべし現今藝妓五十餘娼妓百四十餘名在籍と云此他兩田端或は市街料理店等にある藝妓四五十名ありと高田の繁盛推して知るべし

物　産

鏑　昔時より高田鏑とて産物の一となり京坂其他へ輸出せり内國勸業博覽會及ひ萬國大博覽會等へ出品し其賞狀を賜り普く世人の知る所なり其製作は用所に依り形ちを異にせり其名を記せんに鬢毛拔鼻毛拔髭毛拔揚技鏑襟毛拔刺毛拔節採等の各種とせり　嵯峨御所御用を相勤め鏑子師肥後大掾藤原喜宿と稱を賜はると云製造主小林七郎右衛門氏は松平光長卿越前より高田へ移封の際隨從し現今の下細屋區耶地は其初り拜領地にて當主七郎右衛門氏は十一代にして元和九年より二百八十餘年の久しきを經て耶地を變更せず連綿たる舊家なり

明治三十五年五月　東宮殿下　御巡行の砌り特に　御買上けの光榮を賜れり

粟餅及翁餅　横春日區高橋孫左衛門の製する所なり往古より高田産物と稱し加州三家江戸參勤常地宿泊の際土産とし買收せられしも輸出せざりしが文明の世となり内國勸業博覽會へ出品せしに歐州人の賞味する所となり横濱に支店を開くに至り尋て萬國大博覽會へ出品せしに非常の高評を得兩會より賞狀賞牌等を給はり歐州各都府商店へ輸送せりと高橋氏の名譽と謂つべし

鑄物師　往古より鍋屋町にあり山岸九郎兵衛山岸彌右衛門の二氏耶地に工場を建設し鍋釜其他各種を鑄造し下越佐渡信州地方へ國産として輸送す維新前藩用大炮ライフル等を鑄造せり其後彌右衛門は廢業し九郎兵衛は業務を擴張し蒸氣機關を据附長野市新潟市直江津町等へ支店を開設し又古城直江津へ工場を建築し蒸氣汽車等の器械其他種々製造す近頃株式會社直江津鐵工場と改稱す

自動消火器　丸山式自動消火器の發明者たる當町字呉服區丸山安治氏が多年の苦心と巨多の工夫とを凝し遂に今日の如き應急消火に至大の効力を有する輕便無比の良器械を按出したるは世の以て多しとする所にして從來我國に二種の消火器あり一は消火器の全体を轉倒し一は藥瓶を破壞す前者は劇藥濡損の虞あり隨て効力の減殺し以て保存力に堪ふる能はす後者は藥瓶を破壞するを以て動もすれば破片の噴水口を閉塞して用を爲さゝるの恐れあり而て掃除の危險にして藥瓶補給の不便なる二者共に長短あり未た以て完全の消火器と云ふを得べからす是氏か該器の改良の必要を感し多年の工夫と經驗とを以て漸く劇藥の容器を自動式と爲し且つ密閉裝置を施して器中瓦斯の發數を防くの良法を按出したる所以なり明治三十四年十一月特許を得爾來益々斯道の研究に工夫を凝らし且つ器械製造の上に意を注き堅牢なる地金を撰ひ充分製錬し防腐金屬を塗布したるを以て幾年を經るも決して腐蝕破損の虞れなく加ふるに機械の上部に手鍵を裝置したる

を以て携帶に甚だ便利なり故を以て當時大日本消防協會會頭芳川内務大臣より有効の証明書を下附せられたるのみならず警視廳其他より褒章讃辭を得たるもの枚擧に遑あらず斯る次第にて今や内地は勿論南洋諸嶋へ輸出するもの年一年增加し殆んど其供給に堪へざるの盛況を爲すと氏の効蹟偉大なり

火防夫　藩主時代は關横竪兩泰日上下田端長門の六ヶ町を以て火防夫を組織し町奉行の指揮する所なり維新となり各所に消防夫を組織し警察署の指揮に屬せり此際高城村は率先し喞筒一臺を備へ火防夫を置かす漸次各組も龍吐水を改め喞筒を供ひ近年消火器の設けあり爾來火災あるも大事に至らざるは火防器の設備あると火防夫の盡力に因てなり

筆工　當市街筆工專業者維新以來小學校等の需用者多きに至り漸々增加せり精工と信用を得諸官衙學校等へ多く販賣せるを成章堂呉服區と云氏は大筆の軸附きより腐敗の憂ひあるを多年工夫を凝らし軸を木にて製し側軸となし其上下に銀或は象牙を以て輪を附し毛筆の動かさる樣工夫をなし使用の後ち輪を放ち墨汚を能く洗除し軸を開らき能く乾し元の如くなし貯藏せば數年を經過するも腐敗の恐れなく良結果を得申賣特許にて販賣せり爾來京坂又は東京其他より注文に應し輸送せりと人智の發達に伴ひ新工夫の地方に增加するは喜はしき事ならずや

成文堂　は上小區にあり美術筆画伯用筆等精工を得北海道韓國臺灣等より注文を受け輸送せりと云

玻璃製造場　相羽氏の東二ノ辻に工場を建設せしを嚆矢とせり後ち中小區に移り玻璃類洋燈各種販賣尋て石炭騰貴し收出購さるより天然瓦斯を利用せんと東頸城郡川邊村へ工場を移せしより一の製造所なかりしが近頃中小區倉石氏自邸に該場を建設し玻璃類一式を製造し市街各商店へ販賣し地方產となり繁盛に趨けりと云ふ

瓦燒工場　高城村字南土橋にあり本郡和田村字茶屋町大島文治郎氏の創設にて明治三十六年五月仝村字尾張に工場を建設し瓦及ひ土管井戸ガハ類其他注文に應じ製造せり近頃工場を隣地現今へ移し百事改良を加ひ販路を擴張し爲に倍し各地方の注文に應せり土管瓦等の輸入を減するのみならず輸出するに至れりと本燒堅牢にして人々の稱する所なり

團扇　中小區武田氏の開業する所なり各商店競ふて奉は略暦夏は團扇とて來客に呈し廣告を兼たる事を例とせり此の機に乘じ京坂地方より地紙骨竹等を購求し團扇製造を開始せしより東京或は京坂地方へ注文せし商家は武田氏に依頼するに至り當今一萬本以上を製し下越佐渡西頸城郡地方より注文を受け輸出するに至れり

葡萄酒　開明の世となり各自衛生を重んじ攝生に注意するに至り葡萄酒は滋養に富み身体を强壯にし衛生上必要の良藥なりとて盛んに流行し當市街へ輸入する峰印其他の該酒販賣店各所にあり近年本郡北方川上善兵衛氏葡萄園を設け國產を開始せんと字岩野原に該園を創立し歐州各國より三百餘種を取り寄せ刻苦積年其功を奏し方今葡萄酒の種類多しと雖も純粹葡萄酒に如くものなし菊水葡萄酒と稱し當市街各字内に販賣店を開き東京其他各縣下へ輸出し獨立たりしが當時株式會社となし中小區に日本葡萄酒株式會社と票札を掲けり東京府下神田區旅籠町に支店を設置せり

明治三十五年五月廿九日[illegible]皇太子殿下葡萄園へ　行啓あらせられ該園　御巡覽尋て工場及び醸藏所等へ玉歩を移させられ園主川上氏の光榮積年の辛苦直ちに全國に顯はれ地方に來る來賓或は長野縣下各學校生徒等の修學旅行者は園の巡覽を請ふもの多し氏は身命を投擲し善良なるを製造せんと一家擧て勉勵せりと聞く[illegible]

油漕場　高田停車場隣地にあり寶田石油株式會社高田出張所と招牌を掛け元長岡興業會社の油槽場を建設設し本郷柳池村字北野より今池を經高城村高田町を貫通し二吋鐵管を埋伏し油送せり[illegible]此延長五万五千尺又是より稲田川原製油場へ同し鐵管を伏せ送れり寶田會社事業擴張し該會社の建物其他悉皆明治三十七年十月一日買收し前記の如く票札を改め事務所及び「タンク」を改造し日々製油を東京其他へ發送せり同業者數多あると雖も當會社の右に出づるなしと云[illegible]

木材塗　美術とし種々木材に依り塗り分ち寶物と同思せらる眞に驚くべし下小區漆器大野氏美術木材塗業に從事する事數年業成り歸國開業し爾來各地方より注文に應じ輸送すと又西洋ペンキ塗は官衙或は學校等の建築の外ペンキ塗なかりしが追々洋風模造家の建設せるに依り同氏繁昌に趣けり是亦一進歩と言ふへし[illegible]

ボール箱　美麗に裝飾せしボール紙にて製したる箱にて進物には手輕且美なるを以て菓子商店にては從來の箱に換ひ需用し又貼附する所の商標も美にして人目を引くに至れり當市街に四五製造家あり當時輸入の半を占むると云

素麺切　素麺或は干饂飩等を製造するは容易の手數にあらざりしか近頃器械を利用することとなり其器械は十坪内に据附設く輕便にして又一器械に三人の職工を要し日に五十貫粉を製する事を得るに其仕方を畧記せんに程能く粉を練り上段に附着し事の運轉に從ひ巻くと撫丈となる是を再三巻き返し程度に至る然し底中段下段の三方へ手筋となり切り出すを箸にて中下二段へ差し入れ引き上け箸の儘掛け其丈け丸線七八尺計り三重となる其輪となれるを切るなり當時三三の製造家にて店頭に据附仕用せり昔時の方法と異り簡にして手數少なくのみならず數十倍を製するに驚く從て輸出も十倍に至り漸次此器械を各店に設備するに至るべし[illegible]

料理店

柳糸郷　裁判院前相生町にあり和久井氏の創立にて庭園には遠く妙高難波の諸山を望み風景絶佳なり構造は平屋と二階建の二ケとし裝飾巧みに出來總て行届けり之を專業料理店の開始とせり柳糸郷とは京都の大儒谷鐵臣氏の名命と聞く[illegible]

高陽館　柳糸郷隣地にあり貴顯紳士の旅館に充つるの目的にて有志者協同建設せしも後ち太田氏の所有となり構造は柳糸郷より大なるも風景は柳糸郷に次げり樓上に舞臺を設け能生樂の準備に充て又園外に三階の觀覽所を設けり頂上は風景佳なり惜哉明治三十六年三月火災に罹り半燒失し更に改築せり[illegible]

高陽館記　[illegible]古者尚質素、時或會衆則借寺院、張山野、近世貴文華、都鄙皆有宴會之堂、蓋以壯大相誇、太田喜樂書遊、四方賓其狀、謀鄉家諸子、奥館閣以供縉紳豪客之遊、衆庶歡會之用、館成在明治廿一年、取其地名

名曰高陽、爾來高會盛宴、多張於斯、衆以爲便矣、今茲癸巳、屬余記之、余臨其館、樓上下皆可容數百人、別設三層高閣、各層亦皆可坐數十人、結構合規矩、鐵車過牆側、而門巷幽靜、花木森列、飛鳥集焉、泉水潺湲、遊鱗跳焉、放眼山嶽園野、鬱乎蒼々、海天北開、杳乎茫々、古今名勝英雄興亡之跡、歷々歸指掌、嗟夫事物隨時移、盛衰興世變、凡遊此館者、倚高以寄情、望遠以伸懷、又將把酒悠然、求古人先發後樂之心、以晉諸他日之事業、不亦可乎、諸子與館之意、蓋亦在於此歟、季春望日渡部健藏記

明治三十五年五月　東宮殿下東北　御巡行の砌り、御旅館に充てられ館主恐懼身の措く所を知らず感泣光榮を喜へり先年小松宮殿下御休泊あらせられたる上段の間を更に裝飾し御居間とし御湯殿便殿等を新築せり有栖川宮殿下にも同館に御止宿あらせられ御滯在三日間其三十日　御發車翌日より三日間衆人に拜觀を許せり

紀恩牌

聖帝在位、寰宇承平、萬國仰光、　東宮賢明、平易近民、物望維聚、今茲壬寅五月、　殿下微行入於越後、親覽稼穡之難、途經高田、駐天駒於高陽館、館主太田八十吉感泣干一門之光寵、鐫石餘其事、嗚呼金石有時尽、王澤不盡者、永賢存於人心也、

明治三十五年十二月　　伯爵日野資秀謹識

長養館　淨興寺前踏切の西にあり寺原氏の建設する所なり構造は柳糸高陽の二階に譲らす南方妙高山を望むの一景あるのみ未た星霜久しからさる故風致なしと雖も數年を經過せは庭園風景一層を加ふへし又夏期發の庭園に飛翔するを望む又一興を添へり

日進館　下田端にあり寺島氏の西洋料理店を開始する所なり二階建洋風を摸造し中央に卓を設き花瓶には四季に應じ種々の挿花を以て人目を慰め從來純全たる西洋料理店なく本邦料理の一方に傾きしも今や上戸にも下戸にも好しとやらで送迎會或は宴會も多く茲に開らく共に繁昌なり

牛肉店　昔時より獸肉を食へば神社に詣つするを憚る弊習なりしが維新開明の世となり此弊風も歳月を經るに從ひ消滅し身体を壯健にするは肉食に若くはなしと登樓者も增加せり牛安巫山喜樂の三店は市の中央にあるを以て最も繁昌せり

屠牛場當地になく牛肉を長野或は下越長岡等より購求し牛肉店へ販賣せしを舊藩士山本氏場を五分一に開設せしは實に明治五年なり又牛肉店を善光寺區に開き或は牛乳搾取所自邸に設け牛を養成せり牛肉は身体を强壯にする滋養となり月に數頭を屠るに至れり現今小林氏悉皆繼續營業せり場を別院裏に移せり

遊廓　維新前は當地に公然たる妓樓なく唯直江津町中島と下新町村元出の二ヶ所に公然たる妓樓あるのみ往古より高田に妓樓なく横區卅一戸内廿八戸旅舍の名稱を以て雇人留女或は飯盛と唱ひ各家相當に抱へ純全たる娼妓の姿なりしが公然たるを得す維新後に至り其筋の許可を得貸座敷營業の看板を掲げ軒下に梅櫻柳樹等を植込み体裁を異にし各家瓦斯燈を設き一目遊廓たるを知る藝娼妓共下越或は東京下りあり方今は舊習を一洗せりと三階樓石田最も美未仙境を踏まされば詳細を知るに由なし娼妓百四十餘人藝妓五十餘人と云

高田龍技會　呉服區に招牌を掛けり座の中央に美麗なる唐木作りの高臺の設備あり紅白象牙の玉各二ケを置き臺の左りに玉突捧數本を掛けり是亦唐木作りなり紳士諸彦の運動遊戯場にして午後より夜に入り賑合り龍虎の爭ひは玉當り點數を以て勝敗を決すと云ふ

盆栽　往時より樹園なく海に流船陸に流車開け交通の便に依り室内に盆栽を陳列するに至れり漸々流行せしは紳士の日々職務の頭腦を痛むるは尠少ならず歸家せば先す緩ろき茶を喫し若々たる各種の盆栽を眺め精神を養ふの一助となりしより各家多少の設けあり其餘風傳播するに至り各地方より輸入に從ひ遂に中小呉服の三區に園を開き四季相當の盆栽を店頭に陳列し又園内に百花百樹を培養し其需めに應せり

勸工場　呉服區にあり谷原氏の設置する所なり當地方に一の勸工場なきを憂ひ有志者の發起せしものならすして止みぬ今や谷原氏獨立にて場を開始せり之を嚆矢とせり品價は正札を附し公平を主とし買賣せり

時計　釜谷權六は下小區に開店し御用時計師の看板を掛けしは慶應の初年にして落廬の時計柱掛時計日本製也の修繕をなし後ち西洋時計修復等を爲せり西洋時計懐中時計等の大販賣は竪春日區吉休之に次ぐを下小區多田金直江區吉田各商店とす其職工を東京より雇ひ業務に從事せり從來の掛時計より取扱の簡易なるを以て西洋時計流行に伴ひ其商店追々增加し十八九の多きに至れり

大漁座　昔時より一の興行場の設けなかりしを維新に至り有志者の發起し上田端に一の興行場を建築し大漁座と稱せり爾來芝居其他の興行を開く便を得之に次ぐを呉服區高麗館とす

呉服商店　近年京坂地方に倣ひ各店裝飾一變し加ふるに一層の競爭をなし嫁聟入の衣類幾組となく調製し直ちに來客の需に應する事を得せしめ又當市街氏神の五社へ攝州惠比寿の宮分社を勸請し毎年十月廿日惠比寿講に大賣出を爲し大祭を執行し各商店隨意に飾り物をなし市中の賑合一方ならす

煙草製造所　高田町に六ヶ所あり煙草は明治三十八年四月より官業となり該營業者一般廢せられ稅務署の調査により各店金高に應じ下賜金を拜受せり地方にては風間氏を一等七千圓より五百圓迄として差等あり各自目的に依り夫々開店す專賣局に於て間に合はさるを以て民間に托し目下場外に製造所六ヶ所を設置し製品は小出雲煙草專賣局へ送致し檢査後各商店へ發送然して製品と目方共精良にして喫飲者の勸喜する所にして從來に比せば販路增加せりと聞く

書肆　呉服區にあり室高橋の二店は從來の書肆なり近頃長野市西澤書肆の支店を開設し室高橋と兩店學校用書の競賣を開き定價の一割引となし二店も又一割引に販賣せしより從來の知己に依り賣收高は例年に比較せば差異なし且室氏は西澤氏の眞向ふにあり却て小説本の如きは賣上高は舊に倍せりと聞く

田島印刷出張所　呉服區にあり長野市田島印刷所の支店にして明治三十八年十一月茲に開業し兩替上職人兩印刷者と競爭を試みんとするも之と爭ふべき程の印刷物なく各店甲乙なしとの事

床場　文明開化の世となり理髮所招牌を掲げ都下に倣ひ店の裝飾を競ふに至り体裁の如きは店主の好みに依り異なるも先つ中央に椅子を置き水盤の側らに剃刀を磨し椅子に對し鏡を掛るを普通とせり或は花瓶に四季に從ひ種々草花等を挿入し店飾に供し人目を喜ばすにあり

浴室　維新の御代となる男女同浴を禁せられ湯屋構造を改正し浴室を分ち右女左男とし中央の高床に家主倫兒を督し錢を納る昔時の石榴口を廢し温泉場に模造せり水場浴室とも板仕切を以て分つのみ兩替山田温泉枇物屋玉ノ井の二湯は儀明川橋邊にあるを以て風景佳し馬出燕温泉蓮池の邊りにありて紅白花を交へ樓上より之を望むの風景二湯の上にあり風に從ひ花香の樓上に入る又一賞すへし

協同湯　横區にあり規掟に依り娼妓は朱引外に出つるを許さすと該區三十餘戸にて票記の如き浴場を建設他區人の入浴を禁せり來る者皆美女なり先つ衣を行李に納れ垢磨と石鹸を手に提け場に臨み小桶にて湯を取り体を洗漱一浴して場を出つるや互に訪り顏にて昨夜の黄金郎を掌握せしを語り合ふ無き者は耳を傾け之を羨ひ或は領き完爾として得る所あるもの丶如し之一婦人の話す所異なるへし々々

塵芥箱　塵芥は各自邸内に堆積し或は川に投棄せしは昔時より市街の慣習なりしも衛生法實施となり塵芥を川に棄つるを禁すると共に軒下に塵芥箱を設置し之に棄入するとなり掃除組合を組織し其請負者は毎朝汚物を集め指定の場所へ投棄せり又軒下の溝を改良し汚水を溜滯するとなく又火防用水を毎歳四月より十月頃まて軒下流通せしめ非常に供せり實に文明開化の一進歩と謂つへし又此の請負者にて市街瓦斯燈の點燈をも請負せり

便所　維新前は市街に辻便所の設なく支那朝鮮の如く旅行者は市中路次下水等へ小便をなし丶が明治開明の世となり市街各所に便所を建設せられ往き來の衆人に便を與へ又便所掃除も行届き街路不潔なきに至る衛生上最も嘉みすべき事ならすや

附　言

高城高田一町村醫士辯護士其他住所左記す

高城村字四ノ辻　醫學士　瀬尾原始　東二ノ辻　中川昌義　尾張　合田義宜

蓮池　小池國次郎　高田整春日　溝口良桑　新須賀　從七位　杉本直形

呉服　宮川環　呉服　市野敬信　呉服　小島彦造

呉服　島津彝太郎　上職人　田村眞實　上小　笠島太安

上小　江川鈴彌　中小　宮路重行　下小　小杉繁三

下小　山本允義　陀羅尼　野本直好　陀羅尼　丸山巖太郎

上職人　戸田磊之輔　下小　牧野久米藏　鍋屋區　原本吉春

高城村東二ノ辻　辯護士從七位　寺澤健吉　東二ノ辻　宮川小一郎

寺澤健次郎　古志郡長岡へ轉居　東京本郷區駒込千駄木町轉居

高城村西會所通　辨護士　松本久壽太郎　一ノ橋　栗原是止郎

呉服　石塚讓　馬出　平出辰市

相生町　小瀧寅次郎　呉服　和泉猪之松

上小　從五位勳四等　小原朝思　中小正六位勳六等　川上正直

上職人　川上淳　上職人　從七位　神岡健藏

執達吏　瀨上廣德　小出義信

公證人　大塩正廣（役場上小）

藥劑師及藥舗

吳服　町田久吾　直江山田作太郎　關高橋慶次郎

堅春日　植木文治郎　中小陶山敬治　中小三浦忠治

長門　高橋佐助

日露の戰役は我國開闢以來の一難事にして國家存亡の岐る丶所なり宣戰の當時を回顧せば實に心膽を寒からしむ幸に上叡聖なる　天皇陛下の御稜威と下忠勇なる陸海軍將卒の武勇とに因り戰ば勝ち攻むれば取る連戰連捷國民其堵に安んするを得たるは誠に無上の幸榮と云ふへし然じて其勇烈なる日本魂を世界に輝し給ふ忠勇なる縣下軍人の氏名を記せんとせるも容易の事業にあらす因て本郡人のみを錄せんとするも未た確定せす故に之を越の摘草後篇に讓り先つ高城高田の一町村出身者下士以上と從軍者を左記し且つ名譽なる戰死者を不朽に傳ふ

明治三十九年三月　高城村出身軍人及從軍者　蚊睫巢遜齋

陸軍工兵中佐　正六位勳四等功五級　石栗剛三

同　歩兵少佐　正六位勳四等　高橋直武

同　大尉　正七位　伊東研太郎

同　同　同　同　岡部義雄

同　同　同　從七位勳六等　森岡重美

同　憲兵大尉　正七位　角田利輝

同　騎兵中尉　從七位　內山三郎

同　輜重兵中尉　從七位　梅住榮太郎

同　歩兵中尉　同　室井信道

同　歩兵中尉　從七位　辻武雄

同　同　少尉　正八位　尾北信

同　同　同　同　村井與四郎

同　同　同　同　下五郎三郎

同　同　同　勳七等　渡邊一喜

同　一等軍曹　正八位　合田平

同　二等軍曹　同　增田甚太郎

同　歩兵特務曹長　勳八等　高田彦作

騎兵同上	大野土木雄
工兵同上	落合登喜雄
砲兵同上	三宅藤作
步兵軍曹	清水藤作
陸軍步兵軍曹	山口末吉
工兵同上	酒井己八
同上	八木原弘
砲兵同上	白井彌生
輜重兵同上	鷹見與吉
步兵伍長	谷田清介
同上	酒井拾藏
同上	池井信太郎
一等縫工長	野口貞江
一等計手 勤八等	宮部炎郎
同同同	小川善助
海軍中佐 正六位勤四等	廣瀨弘毅
少佐同 從六位勤五等	加藤壯太郎
同機關大尉正七位	黑田良定
同中尉 從七位	片岡雁
同二等兵曹 勤八等	伊奈數雄
同三等同上	宮崎操
從軍者	
韓國	
同駐劄電信隊通信技手	古島信郎
第二軍兵站監部附通信手	荒木助太郎
鐵道隊派遣手	小林廣
鐵道隊	都筑利直
同上	新村信一
同上	松村十郎
電信	石原靜治
機工	島川知吉
二等巡洋艦(日本丸)主計	島川喜藏
	松本綴江

御用船金州丸乘組火夫　淺野寶
同　大成丸乘組　山田隆二
同　熊本丸乘組運轉士　山片長男
同　揚武號機關士　黑澤三千六
安東縣輕便鐵道技手　荒井綠

第六師團歩兵第十三聯隊第三大隊長岡本茂若馬卒　伊奈雄吉

高田町出身軍人

陸軍一等軍醫正　從五位勳五等功五級　笠島省吾
同　歩兵中尉　從七位　山岸宏隆
同　上　同　山岸斌
同　上　正八位　川瀨愼造
同　少尉　正八位　飯塚保
同　三等軍醫　正八位　溝口美代志
同　曹長　茂利天龍
同　上　和田佐吉
同　工兵同上　高橋讓

同　上　宮崎菊治
同　輜重兵同上　藤澤嘉平治
同　軍曹　勳八等　山崎定四郎
同　上　大山泰助

陸軍歩兵軍曹

同　上　笹川定吉
同　上　市野道雄
同　上　武田重吉
同　上　宮崎淺八
同　上　宮崎誠一郎
同　工兵同上　小林岩太郎
同　憲兵同上　牛木甚五郎
同　歩兵伍長　勳八等　山中長成
同　上　石崎幸四郎
同　上　恩田喜代太郎
同　上　吉田順次郎
三等藥劑官　正八位　小川信夫

一等看護長　勳八等　小森長藏
一等看護長　大久保重吉
二等看護長　清水重次
海軍々醫中監　從五位勳五等　木戸龍仙
同　上等兵曹　宮野永吉
同　三等兵曹　山崎甚左衛門

富士艦載水雷艇長片岡廉氏戰功に依り感狀を授與せらる凱旋の際濱離宮に於て　玉座に接し　龍顏を拜し　勅語を賜り　天盃を拜戴其感狀と招待狀等の寫しを左記す氏の光榮のみならず舊藩士及ひ同藩士の名譽と謂つべし

感狀

富士艦載水雷艇

明治三十七年七月廿四日鮮生角東灣に潛伏せる敵の驅逐艦數隻を奇襲し其三隻を擊破したるは其智勇功績顯著たりと認む依て茲に感狀を授與するものなり

聯合艦隊司令長官　東鄕平八郎

招待狀

宮內大臣

天皇陛下の命を奉じ海軍中尉片岡廉殿を來る十月廿七日午十二時濱離宮に於て備さる、宴會に招待す

明治三十八年十月廿五日

右招待狀中央上部に金の御紋章あり　天盃は陶器にて內に藍にて　御紋章外に金字にて明治三十七八年凱旋紀念とあり

後備步兵第三十聯隊第一大隊陸軍步兵少尉山下五郎三郎同軍曹清水藤作以上高城村同輜重兵曹長藤澤嘉平治
同軍曹大山泰助宮崎彥八山崎定四郎以上高田町の諸氏其外略す戰功に依り感狀及謝狀を授與せらる左に記す

感狀

後備步兵第三十聯隊第一大隊

梅澤少將の命下に屬し遼陽の會戰に當り三阻子か千金嶺を經て細河に在る約八里の線面を守備し八月三十日夜襲を以て敵の據點たる威寧營を奪取し進て本溪湖を占領し九月一日大嶺土門子の敵を驅逐し同二日更に一部を以て香山子附近の敵を驅逐し其主力を以て土門子嶺な敵の右側に進出し同夜夜襲を以て此方面の敵を逐牛繰堡に壓迫す此時遼陽の會戰は方に酣にして敵の側背に前進するを急也しと其一部を以て側面にある平臺子附近に在る敵に當らんとして主力を以て長驅三家子に進入し同四日双龍山の敵を擊退し同五日石門子山一帶の高か三塊石山に亘る線を占領し以て軍の右側掩護の任を全くしたるのみならず遼陽附近な北方に退走する敵に對して大なる打擊を與へたり本職は此に其動作の勇敢

其運動の活敏にして其功績の偉大なるを嘆賞す

明治三十七年九月五日　　第一軍司令官　男爵　黒木爲楨　印

謝　狀

後備歩兵第三十聯隊第一大隊

明治三十七年十月十二日當旅團橋頭より進出して本溪湖を包圍せらる敵の側背を衝くに際し橋頭兵站司令官の招致に應せられたる大隊は地形の困難を排し適當の時機に敵の側面に進出して勇敢に働作し旅團の右側面に在る敵を驅逐し以て旅團をして該方面の敵を擊攘し友軍の危急を救ふを得せしめたり其功績は戚仁の認めて深く滿足する所なり依て茲に其勞を謝す

明治三十七年十月十四日　　騎兵第二旅團長　戚仁親王　印

海軍三等兵曹伊奈數雄氏其他　勅語を賜はる

明治三十七年十二月九日より十五日に至る敵の戰艦「セバストポリー」襲擊に關し　大元帥陛下より左の　勅語を賜りたり

明治三十七年十二月廿四日　　第十五艇隊司令部

勅　語

旅順方面にある我水雷艇隊は連夜風雪を冒し鞏固なる防禦を排し敵の戰艇を襲擊し僚艇相援け寸毫の混亂なく克く其任務を果し益々其操從の技倆と敢爲の氣力とを發揮し得たりと聞く朕深く其事に與り

し將校下士卒の忠烈を嘉す

陸軍輜重兵軍曹鷹見與吉氏本部附書記拜命勤務勵精に依り輜重兵第二大隊補充隊長輜重兵少佐伊藤一雄君より賞詞を受與せらる左に

賞　詞　　陸軍輜重兵軍曹　鷹見與吉

右は明治三十七年二月十日當隊へ應召爾來廿有餘ケ月間庶務掛書記として終始一日の如く上官の命に服し常に品行を慎み誠實且つ勤勉以て戰時幾多の繁劇なる業務に盡瘁し補充隊に稗益を與へたる事多大なりとす依て茲に賞詞を與ふ

明治三十九年二月十九日

名譽なる戰死者高城村の部

海軍大尉從七位勳五等功五級　　内田弘　廿七才

明治三十七年五月二日清國旅順港第三回閉塞の際戰死（愛國丸）

海軍機關少佐正七位勳五等功五級　　竹内三千三　三十一才

明治三十七年五月十五日清國山東角附近にて戰死（軍艦吉野）

陸軍歩兵少佐正七位勳四等功五級　　伊奈重久　三十三才

明治三十八年三月九日清國盛京省田義屯にて戰死

陸軍歩兵曹長勳七等功七級　加藤義英　廿五才
明治三十七年八月二日清國盛京省西遥嶺附近にて負傷後死去
陸軍歩兵上等兵　植木利吉　三十二才
同年九年十五日清國盛京省大平溝東方高地にて負傷後死去
陸軍歩兵特務曹長勳六等功六級　富岡彦三郎　三十二才
明治三十七年九月廿日清國盛京省大平溝東方高地にて戰死
陸軍歩兵曹長勳七等功七級　伊奈良男　廿八才
同年十月十四日清國沙河附近にて戰死
陸軍歩兵二等卒　神谷進　廿六才
同年十一月二日清國金鐘山北部にて負傷後死去
陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　垣上銀治　廿四才
同年同月三十日清國旅順方面にて戰死
陸軍歩兵曹長勳七等功七級　渡邊幸七郎　廿九才
明治三十八年三月九日清國撫順北方高地附近にて戰死
陸軍補充歩兵二等卒　仁木保　廿二才
同年同月十四日清國鐵嶺附近にて負傷後死去

高田町の部

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　清水與作
明治三十七年九月二日清國盛京省黑英臺西方にて負傷後死去
陸軍歩兵上等兵勳八等　横山長三郎
同年九月十九日清國盛京省大平溝東方高地にて戰死
陸軍一等卒勳八等　倉石幸太郎
同年十月十一日清國盛京省寺山附近にて戰死
陸軍歩兵伍長勳八等功七級　清木留吉
同年十月十一日清國盛京省揚墓附近にて負傷後死去
陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小森彦作
同上にて戰死
陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　新本清四郎
明治三十七年十月十二日清國奉天省三家子附近にて負傷後死去
陸軍歩兵伍長勳八等功七級　白石文作
同年十一月廿六日清國盛京省松樹山附近にて戰死
陸軍歩兵二等卒勳八等　眞野廣治

同　上　荒木源太郎

明治三十八年三月九日清國盛京省田義屯にて戰死

陸軍歩兵二等卒勳八等　浦澤隆造

同　上にて負傷後死去　塚田佐一郎

陸軍歩兵一等卒勳八等功七級

同年三月十日清國北陵にて戰死　織田重太郎

陸軍歩兵曹長勳七等功七級　金子彦邦

同　一等卒勳八等　田中常次郎

同　上　廣瀬千代吉

同年三月十四日清國盛京省蘇牙屯附近にて戰死

陸軍歩兵一等卒

同年三月十四日清國鐵嶺附近にて負傷後死去

陸軍歩兵一等卒　寺崎重藏

同年四月廿三日清國盛京省高台嶺にて負傷後死去

陸軍歩兵一等卒　高林保次郎

同年七月十一日清國旅順口西北方一〇三高地にて戰死

陸軍歩兵一等卒　大島武治

同年十一月廿日清國鐵嶺兵站部病院にて病死

陸軍歩兵上等兵　佐野寛治

同年十二月三日清國鐵嶺兵站病院にて負傷後死去

海軍大尉內田弘君傳

內田君名は弘合田義宜氏第二子母は山川氏明治十一年十月を以て越後中頸城郡高城村尾張の里に生る同里內田美信君子なし君か人となりて愛し養て嗣子となし配するに姪松井氏を以てす一家和合して庭に間言なし君明治十七年四月學齡に達し鄉の小學校に入り四年其業を卒ふ其年五月高田高等小學校に入り二年の課程を修め明治廿三年八月高田中學校豫科に轉し勤學六年にして中學の業を卒ふ其中學校にあるや成績優等にして數々賞品を受く頭角嶄然教師皆望を屬す明治廿九年七月海軍兵學校の入學試驗を受け及第せり此の試驗たる程度高尚にして受驗者の難する所なり故大低人々二三回受驗の後成効するを例とす君一回にて直に入學す後進以て名譽となす入校後成績佳良にして常に同級生の前位に居る明治三十二年業を卒ふ其月金剛艦に乘り翌年二月清州に向ふ之を遠洋航海と名つけ本業生始めての出帆とす八月歸る其月常盤艦に移り十二月松島艦に移り北清の役に從ひ歸りて金七十五圓を賜る其勞を賞するなり三十四年一月海軍少尉に任し曙艦に移る其四月正八位に叙せらる三十五年一月盤手艦に移り十月中尉に昇り嚴島艦に移る十二月從七位に進む三十六年二月再び清州に航し八月歸る九月須磨艦に移り分隊長心得となり十二月一日俸給を賜は

る三十七年二月征露の役起り佐世保港を發し對島の竹敷を守備す五月三日第三回旅順港閉塞の聯合船隊の一なる愛國丸に乘り旅順港に向ふ此日東南風急にして逆浪怒濤を排し船の操縱意の如くならす船隊離散して號令全船隊に達せす加ふる敵の砲火は雨降し水雷前後左右に爆發し其猛烈慘憺名狀すへからす此時に當りて愛國丸水雷に觸れ沈沒せり斯る天候の不便と敵の砲火水雷の爲め船員の収容其便を失へ君亦た行衛不明の人となり其前日大尉に昇り其日金鵄勳章功五級勳五等旭日章を賜はる君人となり果敏にして撓ませす幼より海軍士官に志す初め美信君の嗣子たらんとする時父母に要求して曰く余は海軍に志あり其素志を狂げは千金の家も好む所に非す其素志を許さは何ぞ資産を問はす必す命を奉せんと父母强ゆる能はす之を美信君に告く美信君固として尙武の意あり却て其要求を美す故に中學に在りし時より專心勤學同輩に超へ身を律する整正嚴肅にして遊惰放律の行なし進て兵學校に入るや少しも校則の嚴正を意とせす卒業の日同級生百十三人の第十一位にあり成績優等なる推して知るへきなり嗚呼君幼より海軍に志して遂に其望を達す眼中唯に盡忠報國あつて死生禍福は固より期する所に非す重大の任務を盡して其職に斃るも亦た遺憾なかるべし然れども其年は僅かに廿七謀慮藝術駿々として深遠の域に進むの時なり天若し年を假さは將來邦家の爲めに長策を建て洪益を起すや必せり之を思へば多年君を熟知する吾人の如き者實に落涙の滂沱たるを知らざるなり君が履歷を詳述せんと欲して胸臆迫りて筆進ます聊か梗概を記して他年を待ぬむを待つのみ

内田弘君の旅順港第三回閉塞の際戰死せられしを聞て

絶句せめや旅順の海はあせぬとも　　[illegible]

なみ〳〵ならぬ君のはなれは　　頼德

海軍大臣慰問狀寫左に

拜啓陳者今回我聯合艦隊に依て遂行せられたる第三次旅順港口閉塞の壯舉に於て海軍大尉内田弘殿行衛不明と爲れるの報に接したるは本大臣の痛惜に堪へざる所にして同官が多數艦員中より特に撰拔せられ此事業に從ひ能く其任務を完くせられたるの勳績に對しては敬慕措く能はざる次第に候其全く戰死を遂げられたるや否やは未知に屬すと雖も茲に本大臣は前顯の事情に基き熱切なる同情を同官の家族に寄すると共に金八百圓を贈呈して以て聊か慰問の意を表し候敬具

明治三十七年五月十四日　　海軍大臣　男爵　山本權兵衛

海軍大尉内田弘殿家族御中

海軍機關少監竹内三千三君墓碑寫左に

賞勳局總裁正三位勳一等子爵大給恒錄題

君諱三千三、越後國中頸城郡、高城村人、考曰一貫、高田藩柳原氏世臣、母富塚氏、君第一子也、君性好武、明治廿七年入海軍機關學校、學成爲海軍少機關士、累進大機關士、三十六年四月、補吉野艦分隊長、往來韓國、征露役與、二月發佐世保港赴戰地、本艦輕快迅速、專任偵察、從事每戰十有六次皆有功、凡軍艦操縱失宜不能快速、君職在機關稱其任、常爲艦長所委信、方是時露國精鋭據旅順、氣勢大張、我艦隊屢擊破其軍艦、然要塞堅固、加以巨砲、軍艦出役無常、我欲沈輸船塞其港二次、不能完其功、

役募士想十二隻進三行之、君起應募、五月二日夜與十八人、想輪船遠江號、時海軍少佐本田親民爲指揮官、若爲機關長、適南風俄起、怒浪蹴天、與他船相失、君命部員燃炭轉輪突進遠港、敵照探海燈、砲丸雨中機關部、諸器粉碎、君神色自若、遂爆沈想船而歸、後少佐手記當時事、稱其膽勇、爰聞勳賞其閉塞役功、任海軍機關少監、叙功五級、授金鵄勳章、叙勳五等、賜雙光旭日章、十五日君想吉野艦、過山東角北、濃霧蔽海、不辨咫尺、與春日艦衝突沈沒、君與艦長數十人溺死、時年三十一、君爲人溫厚篤實、事親至孝、聚賞勳局書記官藤井善言女無子、頃者親戚相謀、欲建碑於本國高田華嚴寺、以紀其功績、余妻藤井氏即善言姉也、叙其行事、係以銘曰、

風濤海驚、巨砲雷怒、火輪機關、運轉罔誤、嗟君膽畧、養在平素、功成獎賞、實維天祚、惜哉中道、身與艦沈、不見厥殘、遺恨曷禁、英魂不滅、上天監臨、偉迹顯著、穹碑森嚴、

正六位　依田百川撰

明治三十七年六月

正六位　藤井善言書

竹内大機關士參加第三次旅順閉塞有功賦此以贈

學海　依田百川撰

狂風捲濤紛若雪、輪船窮進侵龍窟、嗚呼誰其中其選、滿身是膽沸熱血、奮鬪激戰飛彈間、決死豈敢期生還、天乎不殺我壯士、匪衝銜圍破厝口淵、叱咤蹴起黃海水、强敵股慄不正視、嗟爾己爲龍中擒、盍早投降免斃死、

次依田氏韻贈竹内大機關士

江坂熊藏

義勇勳節如氷雪、決心直衝虎狼窟、砲欺疾雷飛彈、殺戰袍時濺同伍血、出入九死一生間、正氣凜烈完身還、丹心報國平生志、不恐狂風與厝淵、旭旗高照黃海水、宇内列國拭目視、天神有靈君知否、殘賊自古爭逃死、

陸軍歩兵少佐伊奈重久君畧傳

伊奈重久は伊奈重任氏の長男なり家世々高田に住す明治五年五月生る六歳にして鄕の小學國島校に入り十五にして高田中學に入り越て五年其業を卒ふ君人となり沈毅にして寡言軀幹中人に越へすと雖も膂力あり其中學に在るや同輩君の膂力に服し目して驍將となし敢て抗抵する者なし教師君の性行武人に適するを知り之を慫慂する者あり君も亦た自から武人たるを欲み明治廿五年入月陸軍士官學校の試驗を受けて及第す此より鋭意勉勵遂に其業を卒へ廿八年二月見習士官となる尋て少尉に進み歩兵第十六聯隊附となる時に征清の役あり其五月敵地へ出張を命せられ仙台を發し六月宇品を出帆し清國大連灣に上陸し高麗門を守備す十月征台の軍に從ひ大連灣を發し台灣扮察に上陸し尋て二層行に戰ひ遂に臺南府を占領す君皆戰功あり十一月正八位に叙せらる在蕉坑陳發寨を攻撃し激戰數回終に左股を傷く頗る重し乃ち廣島に歸り陸軍豫備病院に入り廿九年一月仙臺の病院に移らんとする途中傷口激痛の爲め數月東京豫備病院に留る五月戰功に依勳六等單光旭日章を賜はり金百五十圓を受く十一月傷未だ癒へさるも自ら請て歩兵第三十聯隊附を命せらる三十九年十月歩兵中尉に任し從七位に叙せられ三十一年十一月中央幼年學校生

徒隊附を命せらる三十四年清國に擾紛あり命を受けて清國に出張し功あり勳五等に叙し瑞寶章を賜はり金百七十五圓を受く十月歩兵三十聯隊大隊副官を命せらる三十五年十一月歩兵大尉に任す三十六年二月正七位に叙せられ三十七年五月歩兵第四聯隊補充大隊中隊長を命せられ十月戰地に赴き旅順に向ひ二百三高地の攻撃隊に加はり戰闘す翌年一月旅順開戰の後直ちに奉天に赴き大戰に參加し三十八年九月一日歩兵少佐に任し同日戰功に依り勳四等旭日小綬章及功五級金鵄勳章を賜はり鐵道破壞の任を受け鋭意事に從ふの際敵兵大敗の餘りに路を求めんが爲め約三十倍の大兵鐵道に向ふ君尤も苦戰すと雖も衆寡敵せず身に四創を受け終に斃る時に三十八年九月一日なり享年三十五越て數月遺骨を先塋の側に葬る君萩野氏を娶り一男一女あり皆幼なり男は家を嗣ぐ君の事に當るや死生禍福を恐れず烈丈夫の風あり同僚深く其死を惜むと云ふ

弔伊奈重久君

類德

露兵十萬向吾軍　砲火百雷煙似雲　勇敢不惜腐若斗　再三破敵是功勳

陸軍歩兵曹長伊奈良男君墓碑

明治三十七年征露之役從軍爲第四中隊第三小隊長戰死於清國盛京省沙河近方小加子村享年廿八

忠魂碑　金谷山招魂所境内にあり日露戰役高田町出身軍人中戰死者の靈を祀る表に忠魂碑元帥侯爵山縣有朋書すとあり裏に篆額隷書にて日露戰役と書し戰死者十九人内一名病死の姓名下たに明治三十九年五月上旬高田尚武會建設とあり淀野氏の書する所なり是北越男子の英名を世界に輝せし人々なれば子弟の模範となるべし是又た永世に傳ふるに足る

明治三十九年七月二十日印刷
明治三十九年七月廿三日發行

（定價金參拾錢）

著作兼發行人　中頸城郡浦城村大字中々殿參番戸　宮川頼德

印刷人　中頸城郡高田町大字上職人百拾參番戸　大山藤一郎

印刷所　中頸城郡高田町大字上職人百拾參番戸　高田印刷合資會社

販賣書肆　高田縣服　高田　隆　書　店
全　西澤　書　店
全　室　直　書　店
全　小　方　書　店

防火器トシテ信頼スヘキハ本器ノ措テ他ナシ

實地奏効感謝狀多數

大日本消防協會有效證

第五回勸業博覽會受賞

丸山式自働消火器

特許

◎本年ハ特ニ大割引販賣仕候

◎販賣店全國至ル處ニアリ

高田町
丸山商會本店
新潟市本町通九番戸
同支店

洋服調進
時計各種
洋品雜貨
古金銀兩替
高田町春日
吉休商店

旅館

高田町下小區
荊城館
坪屋太左エ門
姫路屋
森藤兵衛
同停車場前
荊城館支店
朝日屋
今町屋
大黒樓
精養亭

産地直接仕入卸小賣
いせや陶器店
高田町長門區

醤油
味噌
上稲田
青木周太

和洋紙品々
學校用具類
高田呉服町
鈴木紙店
仝茶町
同店

和洋紙品々
大販賣
勝竹内勝五郎
高田下紺屋町

美術筆工
高田上小町
成文堂

時計大販賣
掛時計懐中時計品々
附屬共洋傘靴類各種
洋服裁縫御好次第
高田町下小區
多田金本店
直江津横町
仝支店

特45
652

高田富史

国立国会図書館

024532-000-7

特45-652

高田富史

宮川　頼徳／著

M39

ADC-1766